

# 免許伝授

二百字換算枚数 二九一枚

こばやし かつあき  
小林 克彰

【あらすじ】

劍の道を究めようと修行に励んでいた一人の若者、佐伯晋一郎が、自分の劍の師匠を、父の仇として、仇討ちの旅に出る物語。

江戸中期、とある小藩の劍術指南役の家に生まれた佐伯晋一郎は、城下で道場を開く脇坂彦衛門の下で修行の日々に明け暮れていた。そんなある日、自宅の道場に呼ばれた晋一郎は、父に切腹の介錯を命じられる。父、佐伯玄之丞は、脇坂と立ち合い、敗れたというのだ。武士は死ぬべき時に死ぬものだという言葉を残して玄之丞は腹を切る。晋一郎は父の首を落すが、心に大きな傷を負い、真劍が使えなくなる。

藩内では劍術指南役たる玄之丞が市井の劍客に敗れて切腹したという噂が広がり、佐伯の家名存続が危ぶまれることになる。親戚筋から晋一郎に仇討ちの圧力がかかるが、当の脇坂は城下を出奔していた。晋一郎は、仇討ちの旅に出るが、真劍を遣えないという心の傷は克服できず、また、師や劍の道に対する自分の気持ちも整理できないでいた。

旅の間、路銀稼ぎの道場破りを繰り返すが、ある時、老劍客に真劍での勝負を挑まれて敗れ、道場破りを断念する。路銀が尽き、空腹で動けなくなっているところを百姓の後家、喜代に助けられるが、仇討ちを断念できない晋一郎は、喜代の元を去る。

またある時、晋一郎は、ヤクザとの喧嘩で重傷を負う。天狗の面を付けた大和田重蔵に助けられ、山中で共に暮し始めるが、その重蔵は脇坂の親友だった。

重蔵に戦いを挑まれた晋一郎はやむなく重蔵を斬り、その形見の脇差を重蔵の妻と孫娘の元に届ける。そこで脇坂の居場所を知った晋一郎は一路江戸に向かう。

江戸で脇坂と対決した晋一郎は立ち合いの途中、重蔵の孫娘、楓に刺されて倒れる。一命は取り留めるが、脇坂と語るうち、晋一郎は自分の生きる道を再発見する。

【登場人物】

佐伯晋一郎（18）（21）（22） 剣士

脇坂彦衛門（38）（58）（62）

道場主・晋一郎の師

佐伯玄之丞（28）（48）

晋一郎の父。剣術指南役

佐伯芳乃（38）玄之丞の妻・晋一郎の母

佐伯美代（14）玄之丞の娘・晋一郎の妹

大山半九郎（32）浪人

喜代（20）百姓の後家

大和田重蔵・天狗（68）脇坂の親友

大和田松（59）重蔵の妻

大和田楓（17）重蔵の孫娘

河島源兵衛（53）玄之丞の義兄

山田無為斎（81）道場主

渡辺源吾（38）山田道場師範代

ヤクザ1 ヤクザ2 飯盛り女 他

○脇坂道場全景

生垣に囲まれた百姓屋のような藁葺の建物。玄関に（剣術指南脇坂道場）の看板。

○同稽古場

板張りのがっしりとした造りの道場。

十数人の若者が激しい剣術の稽古をしている。

薄く目を閉じ、腕を組んで座っている

脇坂彦衛門（58）。沈痛な表情。

目を開き、稽古中の若者達を見回す。

視線の先に佐伯晋一郎（18）。年上の稽古相手を圧倒している。

脇坂、暫く晋一郎を見詰めた後、大声で声を掛ける。

脇坂「晋一郎、相手をして遣わす。これへ参れ」

晋一郎、相手に会釈をして、脇坂の下へ駆け寄る。

脇坂、立ち上がり、壁の刀掛けから木刀を取る。

脇坂「晋一郎、そなたも木太刀で相手をせよ」

晋一郎、意外そうに脇坂を見る。

晋一郎「先生、型稽古ですか」

脇坂「そうではない。立合いである」

脇坂、木刀を持ち、道場の中央に向かう。

弟子達、脇坂に気がつき、稽古を止め、道場の中央を開ける。

脇坂、道場中央に立ち晋一郎を振り返る。

脇坂「どうした。早く参れ」

弟子達、晋一郎を見る。

晋一郎、戸惑いの表情を浮かべながら、自分も木刀を取って道場中央に向かう。

ざわつく弟子達。

道場中央で向き合う脇坂と晋一郎。

脇坂「何をしておる。竹刀が木太刀に変わっただけのことだ。構えよ」

晋一郎、言われるままに木刀を構える。脇坂、木刀を右手にだらりと下げ、無防備に立っている。

静まり返る弟子達。

晋一郎、構えたまま動かない。

脇坂「どうした、晋一郎。これしきの事で臆しては真剣では戦えぬぞ」

脇坂、無造作に間合いを詰め、上段に振りかぶって晋一郎を打つ。

晋一郎、脇坂の打ち込みをかるうじて防ぐ。硬い木のぶつかり合う音が静まり返った道場に響く。

脇坂「それでも当道場の筆頭か。真の勝負と  
思って打ち掛かってまいれ」

脇坂、晋一郎を突き飛ばす。

晋一郎、仰け反って倒れる。

脇坂、晋一郎を怒鳴りつける。

脇坂「その様はなんだ。気合を入れる。すでに免許の腕とっておったは我が目の狂いか」

晋一郎、跳ね起き、大声で気合を發して脇坂に打ち込む。

暫く晋一郎の一方的な攻撃が続く。

脇坂、晋一郎の打ち込みを悉く凌ぐ。

汗まみれの晋一郎の顔に苛立ちの表情。

晋一郎、打ち込むと見せて脇坂に体当たりする。脇坂僅かによろける。晋一郎、足を絡め脇坂を倒す。

晋一郎、倒れた脇坂に押し掛かるように木刀を振りかぶる。

脇坂「それまで」

脇坂の声が掛かる。

晋一郎、木刀を振りかぶったまま動きを止める。

晋一郎の喉もとに脇坂の木刀の切っ先が寸止めに止まっている。

晋一郎、木刀を投げ捨て平伏する。

晋一郎「先生、まいりました」

脇坂、何事もなかったように立ち上がり、晋一郎に声を掛ける。

脇坂「わしを倒したまでは良かったが、相手の切っ先がどこにあるかを見切れぬようでは、いまだ免許には足りぬか。今少し励め、晋一郎」

脇坂、木刀を壁に戻し、道場を出て行く。

晋一郎、自分の喉の辺りをさすりながら脇坂を見送っている。

○佐伯家全景（朝）

板塀に囲まれた、大きいが質素な作りの武家屋敷。

○佐伯家敷地内

庭に小さな道場がある。中から鋭い気合いが聞こえる。

○佐伯家道場内

晋一郎、木刀を持ち、猛烈な速さで型稽古を繰り返している。

飛び散る汗。思い詰めた表情。

道場に寝巻姿の佐伯玄之丞（48）が入ってくる。立ったまま、腕を組み、

晋一郎の様子を見ている。

晋一郎、玄之丞に気づかず、稽古を続ける。

やがて、大きく肩で息をしながら稽古を止め、初めて玄之丞に気づく。

晋一郎「父上、いつからそこに……」

玄之丞、生真面目な表情で晋一郎に近づきながら

玄之丞「晋一郎、そのような刺々しい気合

いを、早朝より吐き散らしてはいけない。

ゆっくりと朝寝もできません」

晋一郎「も、申し訳ありません」

玄之丞「寝所まで聞こえる。母上もこぼしていませんぞ」

晋一郎「はあ……」

玄之丞「このところ毎日ではないか。なにかあったのですか」

晋一郎「いえ……」

玄之丞「そもそも、いくら稽古に気を取られているからといって、私に気が付かないとは、武士として不覚ではありませんか。何の為の修行です？」

晋一郎、玄之丞の言葉も耳に入らない様子で

晋一郎「父上、わたくしを、なぜ脇坂先生の道場に入門させたのですか」

玄之丞「なぜ、とは？」

晋一郎「藩の剣術指南役たる父上が、我が息子を、なぜ市井の剣客の道場にと……」

玄之丞「脇坂では、不足というのですか」

晋一郎「とんでもありません。先生は真の剣士です。その境地は、わたくしなどには計り知れない……」

玄之丞「そう思うのですね。ならば……」

晋一郎「わたくしは、分からなくなっているのです。修行の果てに何があるのか」

玄之丞「修行の果て？」

晋一郎「幾ら懸命に稽古を積んでも先生には近づけない。詰まるところ、父上の後を継ぐためですか。そのための修行ですか」

玄之丞、晋一郎の苦しげな顔を見つめた後、壁の刀架から木刀を取り、晋一郎と対峙する。

玄之丞「構えてみなさい」

晋一郎、正眼に構える。

玄之丞もゆったりと正眼に構える。

玄之丞「上段に！」

晋一郎「はい！」

晋一郎、上段に構えなおす。

玄之丞、晋一郎の構えを見た後、構えに気を込める。

玄之丞「(低いが力のある気合い)」

晋一郎「(甲高い気合い)」

晋一郎、左足を踏み出しつつ、鋭い気合いで応える。

玄之丞、正眼で押してくる。

晋一郎、思わず、後ろに下がりがける。

玄之丞「下がるな！ 堪えよ」

晋一郎「は、はい！」

晋一郎、構えに力を籠め、上段のまま踏みとどまる。

玄之丞、さらに押す。

晋一郎、必死で堪える。額から汗が流れる。

玄之丞「(低い気合い)」

玄之丞、切っ先を晋一郎の喉に狙いを付け、さらに押す。

晋一郎「(悲鳴のような気合い)」

上段に構えた拳が震え、目が見開かれる。

玄之丞「堪えよ、晋一郎！」

玄之丞の木刀の切っ先がゆっくり晋一郎の喉に近づき、首の横を、喉を貫く形で通り過ぎる。

晋一郎、木刀を握りしめたまま、尻餅をつく。荒い息使い。

玄之丞、構えを解き、跪いて晋一郎の顔を覗き込む。

玄之丞「よく耐えた。だが、打ち込もうともしませんでしたね」

晋一郎「か、身体が、身体が動きませんでした」

玄之丞「父が、お前を突くはずがないとは

思いませんでしたか」

晋一郎「そ、そのような事……」

玄之丞「いや、思っていたはずですよ」

晋一郎、息を整えつつ正座し、目をつぶる。

晋一郎「は、はい。確かにどこかで思っていたかもしれませんが」

玄之丞、晋一郎の肩を力強く掴み、立ち上がる。

玄之丞「上段の構え、見事でした。修行は進んでいますよ」

晋一郎「父上……」

道場を出ていく玄之丞。戸口のところで振り返る。

玄之丞「脇坂の元での修行もやがては終わる。だが、剣の修行は一生です」

晋一郎「はい」

玄之丞、束の間、晋一郎を見つめる。

玄之丞「母上が朝餉の支度をしている。汗を流してきなさい」

晋一郎、玄之丞を見送りながら呟く。

晋一郎「先生との修行が終わる？」

玄之丞の去った後を見つめる晋一郎。

○佐伯玄之丞の屋敷門前（夕）

門に続く板塀沿いの道を、晋一郎が剣術の稽古道具を肩に歩いてくる。門の脇の潜り戸を開けて入っていく。

○佐伯家屋敷内居間

佐伯芳乃（39）が佐伯美代（14）に針仕事を教えている。

晋一郎、居間の外の縁側を通る。

晋一郎「只今帰りました、母上」

芳乃、手を止めて晋一郎を見る。

芳乃「おや、晋一郎、戻られたのですね」

美代「兄上様、お帰りなさいませ」

美代、大人びた様子で手を突き、挨拶する。

晋一郎、照れくさげに返事をする。

晋一郎「おお」

芳乃、二人の様子を見て微笑みながら、芳乃「お父様が、稽古から戻ったら道場のほうに来るようにと仰ってましたよ」

晋一郎「道場にですか。何だろう。分かりました。着替えたらずぐに行きます」

美代、悪戯っぽく晋一郎を見る。

美代「兄上様、お小言を頂戴するような覚えはございませんか」

晋一郎「馬鹿をいうな」

晋一郎、慥然とした顔つきで去る。

芳乃と美代、顔を見合わせて笑う。

○佐伯家道場縁側

縁側の板戸はすべて閉められている。  
晋一郎、膝を付き板戸の内に声を掛ける。

晋一郎「父上、只今戻りました」

玄之丞が道場の内から応える。

玄之丞の声「晋一郎か。入りなさい」

晋一郎、板戸を開ける。

○佐伯家道場内

板戸を閉め切った薄暗い道場。

夕日が武者窓から射している。

道場の中央に白装束姿の玄之丞が、背中を見せて座っている。

晋一郎「父上、そのお姿は何事ですか。一体、どうされたのですか」

玄之丞「晋一郎、父はこれから腹を切る。介錯をしなさい」

玄之丞、振り向いて床の上に置かれた刀を目で指し示す。

晋一郎「何と！ お待ちください。切腹とはとんでもないことを。お気は確かですか」

玄之丞、再び晋一郎に背を向ける。

玄之丞「藩には病死と届けなさい。さすれば家が潰えることもあるまい」

晋一郎「父上、とにかくお止まりください。

この晋一郎に訳をお聞かせください」

玄之丞「お前も知るように、父は剣術指南というお役目の傍ら、自らも剣の道を究めようと努めてきました」

晋一郎「はい」  
玄之丞「それが虚しき事だったと悟ったのです」

晋一郎「剣の修行が虚しいとはどういう事です。なぜ切腹なのですか」

玄之丞「武士が一旦決めた事。今更、お前に話しても詮無きことです」

晋一郎、玄之丞の前に回り、坐る。

晋一郎「父上、晋一郎も剣を学ぶもの端くれ。何卒訳を、訳をお聞かせください。ついこの間、剣の修行は一生だとお教え下さ

ったばかりではありませんか」

玄之丞、微笑を浮かべつつ

玄之丞「ふむ、そうでしたね」

玄之丞、瞑目し考え込む様子。やがて眼を開き、

玄之丞「時に、本日の稽古はどうであった。

脇坂は道場に出ていましたか」

晋一郎「いえ、お見かけしておりません。朝

から他出されたとか」

玄之丞「そうか」

晋一郎「父上、先生がどうかしたのですか。

もしや何か関わりが……」

玄之丞「晋一郎、では聞きなさい。父は、今

朝方、お前の師、脇坂彦衛門と立ち合った。

真剣での勝負です」

晋一郎「し、真剣で！」

玄之丞「そうです。そして、敗れた」

○玄之丞の回想・河原（早朝）

朝靄に煙る河原。遠景に橋。

袴の股立ちを取り、襷がけの玄之丞が、

上段に構えたまま、驚きが凍りついた

表情を浮かべて立ち尽くしている。

その背後で、背を向けたまま、胴を斬

り上げた形で残心を取る脇坂。

玄之丞の小袖の胸元が大きく斬られて

いる。

脇坂「これまでです」

脇坂、残心を解き、刀を納める。

玄之丞、膝から崩れ落ちる。

脇坂、振り返らずに、そのまま歩き出

す。

玄之丞「ま、待て！ 脇坂彦衛門」

脇坂、構わず歩き去ろうとする。

玄之丞、抜き身をぶら下げたまま、脇

坂を追う。

玄之丞「なぜ、斬らない。真剣での勝負を望

んだは、決着を付けんが為。それを……」

脇坂、背を向けたまま

脇坂「決着は、付き申したではありません

か」

玄之丞「なぜ、斬らないのか。私は、私は、命を懸けたのに……」

無言で歩き去る脇坂。

呆然と見送る玄之丞。

○元の佐伯家道場内

晋一郎、玄之丞ににじり寄り、膝を掴む。

晋一郎「で、でも、なぜ、切腹なのです。いや、なぜ先生と……」

玄之丞「晋一郎、脇坂との勝負に敗れたその時に、父の命は潰えたのです」

晋一郎「でも……」

玄之丞「脇坂は決着を付けてはくれなかった。だから自ら決着を付けるのです」

晋一郎「父上！ 決着とはなんです」

玄之丞「晋一郎、武士とは、死ぬる時に過たず死ぬるために生きるものです」

晋一郎「死ぬる時に死ぬため……」

玄之丞、話しながら肩脱ぎになる。

玄之丞「そうです。父にとって今がその時。では参る」

晋一郎、慌てて叫ぶ。

晋一郎「お、お待ちください。それは、一体どういう……」

玄之丞、いきなり短刀を腹に突き立てる。低い呻き声が洩れる。

鮮血が白装束の袴や床を染める。

晋一郎「ち、父上っ！」

晋一郎、思わず、玄之丞の手を抑えようとする。

玄之丞、苦しげに叫ぶ。

玄之丞「うろたえるでない。早く介錯せよ」

晋一郎、立ち尽くす。

玄之丞「晋一郎、こ、この期に及んで父に、父に恥をかかすな。脇坂道場筆頭の腕をみせよ」

晋一郎、玄之丞を見詰めたまま、身動きできない。

玄之丞、苦しげに呻いている。血溜りが玄之丞の周囲に広がって行く。

玄之丞「早くせよ、早く・・・」

晋一郎、刀を取り、鞘を払って振被る。

玄之丞の上半身が揺れ始める。

晋一郎、絶叫とも気合ともつかぬ声を上げ、刀を振り下ろす。

#### ○佐伯家仏間

八畳ほどの座敷。庭に面した障子が開け放されていて、手入れの行き届いた庭が見える。

河島源兵衛（53）が、仏壇に向かって手を合わせている。

仏壇に真新しい位牌。煙を上げる線香。

河島の後ろに控える芳乃、晋一郎、美代。

河島、芳乃達に向き直る。

河島「どうじゃ。芳乃殿、落ち着かれたか」

芳乃、河島に平伏する。

芳乃「葬儀の折りは、義兄上様には一方ならぬお骨折り。まことにありがとうございます存じました」

河島「うむ、玄之丞も、まこと人騒がせな死に方をしたもののよ」

芳乃「申し訳ございません」

河島「まあ、あれにもそれなりの存念があったのであろうが、腹を切るなど、普通はやらん」

芳乃「は、はい」

河島、膝を崩し胡坐をかく。

河島「だが、困るのは、この家の事だ。とにかく建前は病死として、晋一郎に家督を継がせればよいと考えておったのだが」

芳乃「はい、せめてそうなればと」

河島「まあ、事實は隠せぬとしても、内々の事であれば、藩庁もうるさい事は云わぬものだ」

芳乃「はい」

河島「だが、妙な噂が流れた」

芳乃「噂と……」

河島「玄之丞と脇坂彦衛門が、坂江川の河原で斬り合いをしていたとな」

思わず顔を上げて、河島を見つめる晋一郎。

芳乃「ま、まさかそのような……」

河島「噂じゃ」

芳乃「はい」

河島「だが、その後、腹を切ったとなれば……」

芳乃「え？」

河島「分からぬか」

芳乃「(呟くように) 佐伯が脇坂様に後れを取ったと……」

河島「当の脇坂がびんぴんしておる以上、世間はそう見る」

肩を落とす芳乃。

戸惑いの表情を浮かべつつ、芳乃を見る美代。

唇を噛みしめる晋一郎。

河島「晋一郎、あれより道場へは行ったか」

晋一郎、俯く。

晋一郎「いえ」

河島「さすがに脇坂も、このところ道場を閉めているようだ」

晋一郎「そうですか」

芳乃「義兄上さま、それでは、家名の事は……」

河島「それよ。仮にも一藩の剣術指南役が、市井の剣客と果し合いをして、その上、敗れたとなれば、それが例え風聞であろうと……」

芳乃「そうですか。やはり……」

河島「そうだ。事は内々ではすまん」

芳乃、顔を上げ、河島を見返す。

芳乃「は、はい、分かりました。無念ではありませんが……」

美代、芳乃の顔を覗き込む。

美代「母さま、どうなってしまうのですか。」

この家は御取り潰しになるのですか」

芳乃「美代、心配しないで」

芳乃、美代の手を取る。

美代の目から涙が溢れる。

河島、腕を組み、二人を見る。

河島「いいか。佐伯の家が潰れるのは、我ら親戚の者としても望むところではない」

芳乃「はい、でも……」

河島「一つ、手立てがないわけではない」

河島、晋一郎に向き直る。

晋一郎、俯いたまま。

河島「晋一郎、お前に脇坂が討てるか」

晋一郎、顔を上げ、驚いて河島を見つめる。

河島「まあ、師弟の情は兎も角としてだ」

晋一郎「そ、それは……」

河島「噂どおりであれば、経緯はどうあれ、脇坂彦衛門は父の仇ぞ」

晋一郎、顔を伏せる。

河島「お前は、家中、部屋住みの中では群を抜く腕前という。聞くところによれば、脇坂の道場でも筆頭というではないか」

晋一郎「いえ、とても先生に及ぶものではないでございます」

河島、晋一郎に詰め寄る。

河島「晋一郎、試合をせよというのではないぞ。仇討ちである。助太刀を立ててもよいのだ。さすれば名人脇坂といえど……」

晋一郎「いえ、そ、それは……」

河島「よいか。この件では、脇坂が直に手を下した訳ではない以上、家中でもない者を、藩はどうすることもできん。まして、今のところ、只の噂だ。だが、晋一郎、お前が仇を討てば、佐伯の家名もあるいは……」

芳乃、継るように、河島ににじり寄る。

芳乃「義兄上さま、お待ちください。家名も大事ではございますが、この上、晋一郎に、晋一郎にもしものことがあれば……」

河島「だが……」

晋一郎「伯父上、失礼いたします」

晋一郎、立ち上がり、小走りに部屋を

出ていく。

○脇坂道場門前

粗末な冠木門。扉は閉ざされている。  
晋一郎、息を切らして駆けつけ、閉ざされた門を暫く見つめる。  
息を整え、潜り戸を開き中に入る。

○脇坂道場庭

殺風景な庭。

晋一郎、庭から道場に向かう。

道場の前に立つ晋一郎。

道場は板戸が閉ざされ、人の気配がない。

板縁に上がり、板戸を開ける。

薄暗い無人の道場。

晋一郎、板縁に続く渡り廊下から母屋に向かう。

○母屋・板の間

渡り廊下から続く板の間。囲炉裏が切られ、竈のある土間に接している。

晋一郎、閉じられた板戸の前で跪く。

晋一郎「先生！ 晋一郎です。いらっしやいますか」

晋一郎、板戸を開ける。六畳ほどの脇坂の居室。質素な座敷。無人。

きれいに片付いているが、文机や飾り棚などの家具調度類は、いつも通りの様子。

晋一郎、座敷に入る。

○脇坂の居室

晋一郎、辺りを見回す。

晋一郎「先生、いらっしやいませんか」

晋一郎、ゆっくり部屋を横切り、奥の襖を開ける。

次の間は客間らしい座敷。片付いているが、同様に無人。

○母屋客間

晋一郎、客間に入ってくる。

床の間のある十畳ほどの座敷。

床の間に三方が置かれ、その上に一卷の巻物。

晋一郎、巻物に気づき、床の間に歩み寄る。

晋一郎、三方の上の巻物を見下ろす。

巻物に「脇坂流伝書」の文字

晋一郎、思わず巻物を手に取る。

手に取った巻物を見つめる晋一郎。

思い切ったように巻物を広げる。

中は白紙。巻の末尾に走り書きのような文字で「余は汝が父の仇なり」の一行。

巻物を手に立ち尽くす晋一郎。

○佐伯家居間

沈んだ顔で針仕事をしている芳乃と美代。

微かに晋一郎の気合いの声が聞こえる。

美代「お母様、美代には、兄上の考えている

事がわかりません。近頃は道場に籠りきり

で、口も利いてくれないし」

芳乃「そうですね……。どうしたのでしょうか  
ね」

美代「兄上は、本気で父上の仇を……」

芳乃「いいえ！ 晋一郎にそのような事を考

えて貰っては困ります」

美代「でもお母様……」

芳乃「仇討ちなど、とんでもない事です」

美代「はい……」

不安げに芳乃の顔を見る美代。

一心に針を動かす芳乃。

○佐伯家道場

晋一郎が一人で稽古している。

木刀を握り、裂帛の気合いと共に、流れるような動きで型稽古を繰り返す晋一郎。その顔には何の表情も浮かんで

いない。

やがて、床に正座し、息を整えた後、真剣を腰に差して立ち上がる。柄に手を掛ける。苦しげな表情。かすかに震える拳。真剣を抜き放ち、正眼に構える。

○玄之丞切腹時の佐伯家道場（フラッシュユ）

腹に短刀を突き立てている玄之丞。悲鳴と共に介錯する晋一郎。

○元の佐伯家道場

晋一郎「悲鳴のような叫び声」

やみくもに刀を振り回す晋一郎。

苦しげな表情

息を切らしながら刀を構えなおす。

○脇坂道場（フラッシュユ）

倒れた脇坂に向かって木刀を振り上げる晋一郎。その喉もとに脇坂の持つ真剣の切っ先

脇坂の声「まだ免許には足りぬか。今少し励め、晋一郎」

○元の佐伯家道場

上ずった気合いと共にぎこちなく真剣を振るう晋一郎。

荒い息使い。苦しげな表情。

息を整え、木刀の時のような型稽古を繰り返す試みるが、どうしても太刀筋が定まらない。

晋一郎「（叫び声のような気合い）」

苛立ちの表情を浮かべ、刀を投げ出し、座り込む晋一郎。

玄之丞の声「武士とは、死ぬる時に過たず死

ぬるために生きるものです」

晋一郎「父上！ それは何時です。私は何時

死ねばいいのですか」

拳で床を何度も叩く晋一郎。

○佐伯家居間

不安げな面持ちで座る芳乃と美代。

二人と向かい合って無表情で座る晋一郎。

芳乃「し、晋一郎、話とはなんです」

晋一郎「母上、晋一郎は脇坂先生を追って旅に出ます」

芳乃「晋一郎、それはどういう……」

晋一郎「父上の仇を討ちます」

芳乃「な、何を言うのです」

美代「お兄様！」

芳乃「父上が脇坂殿と立ち合ったというのはただの噂です」

晋一郎「その噂で佐伯の家が潰れようとしています」

芳乃「まだ決まった訳ではありません」

晋一郎「噂は本当です。腹を召される時、父上からお聞きしました」

芳乃「なんと、それは……」

美代「では、父上は、やっぱり脇坂先生に敗れて……」

晋一郎「そうだ、美代。父上は、無念の思いを残してお腹を召された」

美代「でも、でも父上でも敵わなかった方を

お兄様が……」

芳乃「晋一郎、馬鹿な事を考えるものではないりません。あなたが脇坂殿を討つなど……」

晋一郎「仇討ちは武門の習いです。父の無念は子である私が晴らさねばなりません」

芳乃「何が武門の習いですか。そもそも、父上は脇坂殿に斬られたわけありません。ご

自分の考えで、お腹を召されたのです」

晋一郎「私は、この手で父上を介錯しました。その私が、仇を討たねば、父上に申し訳が……」

……」

芳乃「いえ、晋一郎、確かに申し訳なきこと

なれど、この母にとつて、夫の無念も佐伯

の家名も、今となつては、そなたの命と引

き換えにできるものではありません」

晋一郎「母上……」

芳乃「河島の義兄上はああいわれたが、名人といわれた脇坂殿を相手にそなたが、どれほどのことができよう」

晋一郎「母上、勝ち目がどうかではありません。武士は死ぬべき時に死ねと父上は言い残されました。晋一郎も武士の子です。父の仇も報ぜずに、のうのうと生きていくことはできません」

芳乃「そなたが何と云おうと、母は許しませんよ。この上、そなたを失えば母も生きていくことができません」

厳しい目で晋一郎を見つめる芳乃。

見返す晋一郎。

不安げに芳乃を見る美代。

○佐伯家門前（早朝）

薄明の中、門の脇の潜り戸が開いて、手甲、脚絆、野袴という旅姿の晋一郎が出て来る。

閉じられている門の扉を見つめ、深々と一礼した後、足早に去っていく。

○佐伯家台所（朝）

包丁で菜を刻んでいる音が響いている。襷がけで朝食の支度をしている芳乃。

美代が駆けこんでくる。

美代「お母様、兄上が、兄上が……」

包丁の音が乱れる。芳乃の手が止まる。

芳乃「長い事、包丁はおせんに任せていたので、母の腕も鈍りました」

美代「兄上が見当たりません」

芳乃「やっぱ里に帰さねばよかったですし  
ようかね。でも、近いうちにあなたと二人  
きりの暮らしになると思ったから」

美代「お母様……」

芳乃「仕方ありません。どの道、こうなった  
のですよ」

美代「兄上はどこへ行かれたのでしょうか」

芳乃「はて、どのような当てがあるのか知り  
ませんが、路銀などはどうする積りなので

しょうね」

再び包丁を握る芳乃。

泣き出す美代。

### ○街道

田畑の中を通る人影のまばらな街道。

水田は田植えを終えたばかり。

道のわきに一本の桜。満開である。

着流しの晋一郎（21）と薄汚れた紋

付・袴姿の大山半九郎（32）が連れ

だつて歩いている。

晋一郎は腰の大小の他に、背中に刀袋を背負っている。

大山、手に瓢箪。時折、口を付ける。

瓢箪を道の外に投げ捨てる。

口を手の甲で拭う。

大山「佐伯氏、そろそろ、路銀も乏しいな」

晋一郎「そうですね」

大山「まあ、次の城下まで行けば、何とかなるだろう」

晋一郎「そうですね」

大山「しかし、旅は道連れとはよくいったものだな。お主と拙者が組めば、道場破りはいい商売だ」

晋一郎、薄笑いを浮かべて言う。

晋一郎「大山さんの腕では道場破りはできませんよ」

大山「お主も言いにくい事を平気という男だな。だがな。お主のように只相手を叩き伏せるだけでは実入りは増えんのだぞ」

晋一郎「そんなものですか」

大山「相手も商売だ。評判というものを気にする。そこを突いてだな、うまく話を付ければ五両が十両、十が二十になるのだ」

晋一郎、気のない様子。

晋一郎「まあ、そっちの方は大山さんに任せますよ。私はどうでもいい」

大山「おう、任せておけ」

二人、ぶらぶらと歩いていく。

大山、しきりと何か話しかける様子。

晋一郎はうわの空。

○村上道場門前

がっしりとした造りの大きな冠木門。  
門柱に「一刀流村上道場」の文字。  
看板を見たり、門の中を覗き込んだり  
している大山。  
中から掛け声や竹刀のぶつかり合う音  
が聞こえる。

門の脇に懐手で退屈そうに立っている  
晋一郎。

大山「これは流行っているな。田舎道場だが

二十は固いぞ。佐伯氏」

晋一郎「そうですか。ならまあ、早いとこ片  
付けましょう」

大山「おお。ではいくぞ」

大山、肩をそびやかせて、門に入って  
いく。

大山「頼もう！ 頼もう！」

晋一郎、大山の後ろを懐手のまま、歩  
いていく。

× × ×

晋一郎、懐手のまま門を出て来る。  
大山、晋一郎に続いて、後ろを振り返  
りつつ門を出て来る。門の内側に向か  
って叫ぶ。

大山「いや、御心配めさるな！ 我らも武士  
の端くれ。一旦、約定を交わしたからには、  
金輪際口外はせぬ。大丈夫じゃ」

大山、懐から金包みを出してにやりと  
笑う。

○村上道場・中

広い板張りの道場。

大勢の門弟たちが倒れ、呻いている。

壁の羽目板は割れ、あちらこちらに折  
れた竹刀や木刀が散乱している。

村上らしき男が拳で床を叩いている。

○旅籠内（夜）

飯盛り女を置く旅籠。  
けばけばしい座敷。

座敷の真中で大山が、でたらめな踊りを踊っている。

飯盛りらしき女と三味線、太鼓の芸者数名、笑い声をあげている。

大山、時折女たちに抱きつく。

女達、嬌声を上げる。

晋一郎、退屈そうに盃を口に運んでい  
る。

飯盛りの一人、晋一郎の傍に倒れ込む。

晋一郎の肩に手を置き、耳元で囁く。

飯盛り「どうしたんだよ、つまらない顔して  
さ。若いのに年寄りみたいだよ」

晋一郎「そうか」

飯盛り、顔を一層近づけて

飯盛り「ねえ、何がしたい？ お足さえはず  
んでくれれば、何でもしてやるよ、ねえ、  
どんなふうにして欲しい？」

晋一郎、飯盛りに初めて気が付いたよ  
うに、その顔を見る。

晋一郎「(咳く) そうだ。何がしたいのだろう  
な、私は……」

飯盛り「え、何だって？」

晋一郎「いや、なんでもない。おい、注いで  
くれ」

飯盛り「何だい、まだ飲むのかい。役に立た  
なくなっちゃうよ、お楽しみの前にさ」

晋一郎「いいから注げ」

飯盛り、酒を注ぐ。

晋一郎、一息で飲み干し、飯盛りに盃  
を差し出す。

飯盛り「ねえ、いい加減にしなよ。飲んでば  
っかりいないでさ。ねえ、ほら」

飯盛り、晋一郎の手を取り胸元に導く。

晋一郎、されるがままに、襟元から手  
を差し入れ、乳房を思い切り掴む。

飯盛り「痛い！ 何すんのさ！」

飯盛りの声に、一同、静まる。

大山、顎を搔きながら飯盛りに声を掛

ける。

大山「おい、女、その仁は女より酒だ。それに少々酒癖が悪い。こっちへ来い。俺が代わりにかわいがってやろう」

飯盛り、気味悪げに晋一郎を見て、立ち上がる。

晋一郎、飯盛りに見向きもせず、徳利から直に酒を呑む。

#### ○山田道場門前

丸太の門柱だけの門。

「柳剛流山田道場」の粗末な看板。

大山、門の中を窺い、首を傾げる。

大山「こりゃ駄目だな。とんだ貧乏道場だ。

せいぜい二、三両というところだな。昨日の今日で、端た金を稼ぐこともないか」

大山、振り返って晋一郎を見る。

晋一郎、大山に構わず、黙って門の中に入っていく。

大山「おい、待て、佐伯氏。え、やるのか。

なあ、おい、やるんだな。え、そりゃまあ、いいが……」

大山、慌てて後を追う。

#### ○山田道場・庭

踏み均された土の庭。

門弟たちが稽古をしている。

子供が多い。大人たちも見るとからに百姓、町人といった様子。

晋一郎、黙って門弟たちの稽古を見ている。

大山、晋一郎の顔を窺い、やれやれといった様子。

大山「稽古中、お邪魔いたす！ 我ら、兵法研鑽の為、諸国を旅する者で御座る。ご当地に置いて御高名な山田先生に一手ご教授願いたくまかり越し申した」

門弟たち、だんだんに稽古を止め、大山と晋一郎を見る。ざわつく中「何だ、あれは」「道場破りか」の声。

大山「山田先生はどちらか！」

門弟たちの中で、子供たちに稽古を付けていた男、渡辺源吾(38)が近づいてくる。

渡辺「先生はご高齢のため、もう道場にはお出になりません」

大山「なるほど。して御貴殿は」

渡辺「先生に代わって稽古相手を務めておる者です」

大山「なるほど、なるほど。師範代という訳ですな。では御貴殿に一手なりとご教授いただこうか」

渡辺「それはなり申さぬ。他流との試合は先生に固く禁じられております故」

大山「いや、試合ではござらぬ。稽古を付けて頂こうというばかり……」

渡辺「何と言われようと、先生の御指示です。門弟でもない者には稽古はつけられません」

大山「なんと。山田先生ともあろう方が料簡の狭い事を。御高名を慕って訪ねて来た我らを、黙って追い返すというのか。それでは……」

晋一郎、大山の話の途中で、稽古場の中央に向けて歩き出す。

大山「おい、まだ話が付いておらんぞ」

門弟たち、道を開ける。

晋一郎、稽古場中央に立ち、木刀で二度、三度と素振りを与える。

晋一郎「さて、どなたからか？」

ざわつく門弟たち。

晋一郎「この道場に、腕自慢の方はいないのですか」

顔を見合わせる数人の若者。

晋一郎「いくら田舎道場でも、遊びで剣を学んでいる方ばかりではないでしょう」

晋一郎、周囲を見回す。

渡辺、晋一郎の前に立つ。

渡辺「勝手な真似は止めてください」

晋一郎「ほう、あなたがお相手下さるか」

渡辺「馬鹿な」

晋一郎「ならば、そこを退けてください。ほ  
ら、後ろの方が、腕をさすつていているよう  
ですよ」

渡辺、振り向く。

一人の大柄な若者が木刀を手に近づい  
てくる。

渡辺「五郎太！」

五郎太「渡辺先生、やらせてくださいませ。こ  
んな破落戸のようなものにでかい面させてお  
くわけにやいかねえ」

五郎太、渡辺の前に出て正眼に構える。

晋一郎「ほう、中々よい構えです」

晋一郎、片手で木刀を構える。

渡辺、後ろから声を掛ける。

渡辺「待て、五郎太！」

晋一郎「(気合い)」

五郎太「(大きな気合い)」

五郎太、気合いを繰り返して掛けるが踏  
み込めない。

晋一郎「どうしました。構えが良くても、打  
ち込んでこなければ勝負になりませんよ」

五郎太、気合いを発しつつ、大きく踏  
み込み、木刀を真っ向から振り下ろす。

晋一郎、構わず、片手のまま身を沈め、  
大きく踏み込んで胴を払う。

五郎太、その場で崩れ落ちる。

晋一郎「さて、次はどなたですか」

殆どの門弟も尻込みする。

晋一郎「どうしました。ここにはまともに剣  
を遣える人はいないのですか」

晋一郎、門弟たちを見回す。

数名の若者たちのいる方を木刀で差し、  
晋一郎「何なら、その辺の元気のありそうな  
方々、まとめてお相手しましょうか」

若者たち、顔を見合わせる。

「くそ」「馬鹿にするな」と叫びつつ、

五、六名の若者、木刀を構え、ばらば  
らと晋一郎を取り囲む。

渡辺、若者たちと晋一郎の間に、割つ  
て入る。

渡辺「待ちなさい。勝手な事をするでねえ」

若者1「だども……」

若者2「我慢できねえ」

渡辺、若者たちの顔を見回しつつ、

渡辺「こんな者を相手に怪我でもしたら馬鹿臭いでねえか」

渡辺、晋一郎に向き直って

渡辺「仕方がない。では、それがしがお相手いたします」

晋一郎「おう、師範代殿が稽古を付けてくださるか。これはかたじけない」

渡辺、木刀を下段に構える。

晋一郎、後ろに下がって間合いを取り、両手で正眼に構える。

暫く対峙する二人。

渡辺の顔からは汗。

老人の声「何をしとるか！」

門弟たちが道を開ける。

小柄な老人が覚束ない足取りで歩いてくる。道場の主、山田無為齋（81）

である。

無為齋「渡辺、何をしておる。お前が怪我をしたら門弟たちを誰が教えるか」

渡辺、構えを解いて無為齋に頭を下げる。

渡辺「も、申し訳ございません」

無為齋「下がっておれ。客人の相手は儂がしよう」

渡辺「で、ですが先生……」

無為齋「よいというに」

渡辺「はっ」

大山、無為齋に近づく。

大山「これはこれは、山田先生でござるか。

稽古中お騒がせいたしましたして申し訳ござらん。我ら修行の旅の途中……」

無為齋「金はないのじゃ」

大山「いや、我らは……」

無為齋「本来なら幾ばくかの金子を包んでお帰り頂くのじゃろうが、あいにく当道場には一両はおろか五百の金もない有様でござ

つてな」

大山「はあ」

無為齋「じゃによって、此度は、この老骨がお相手いたそうかと」

大山「は？」

大山、あつけにとられた顔。

無為齋、大山の脇をすり抜け、晋一郎と向き合う。

無為齋「師範代が怪我をしては門弟たちが困るでな。儂が代わりを務めますじゃ」

晋一郎「御老人こそ怪我どころではすみませんよ」

無為齋「なに、儂なんぞが死んでも誰も困りませんでな。それにもう充分生き申した」

無為齋、無造作に刀を抜く。

門弟たち、ざわめく。

晋一郎「御老人、何の真似です」

無為齋「まあ、此度は真剣で参りましょうかの。いきなり見ず知らずの道場に乗り込もうという方々じゃもの。その位の覚悟はおありじゃろうて」

晋一郎、困惑の表情。手に持った木刀を見つめる。

無為齋「ほれ、お抜きなされ。遠慮は無用でございますよ」

晋一郎、木刀を投げ捨て、刀を抜く。

晋一郎、正眼。

無為齋は下段。薄く目を閉じて立っている。

晋一郎「(気合い)」

無為齋、反応しない。じっと立っている。

晋一郎「(気合い)」

無為齋、全く反応しない。立ったまま、眠っているかのよう。

晋一郎の刀の切っ先が震え始める。

晋一郎の額から汗が噴き出す。

晋一郎「(悲鳴のような気合い)」

無為齋、目を開け、無造作に間合いを越える。

晋一郎、つられて打ち込む。

無為齋の下段が振り上げられ、晋一郎の刀を受けるが、勢いに押されて受けきれず、よろよろと転ぶ。

尻餅を突いた無為齋、そのまま切っ先を晋一郎に向ける。

晋一郎、無為齋目がけて振り下ろそうとするが、動けない。切っ先が震えている。

無為齋、のろのろと立ち上がる。

無為齋「どうされたかな。斬ってもよかったのじゃぞ。尋常な立ち合いじゃ。恨みはせぬよ」

無為齋、刀が重そうな中段。切っ先が下がっている。

晋一郎、正眼。切っ先が震えている。

無為齋、間合いを詰める。

晋一郎、怯えたように下がる。息が荒い。

無為齋、わずかに切っ先を上げ、晋一郎の小手を狙う。太刀行きがあきれるほど遅い。

晋一郎、ぎこちなく力いっぱい払う。

無為齋、刀を取り落としそうになりながら顔をしかめ、下がる。

相正眼で対峙する二人

無為齋、構えをのろのろと八艘に変える。

晋一郎の切っ先の震え、大きくなる。目は見開かれ、息がさらに荒い。

無為齋、一步踏み出す。

晋一郎、刀を投げ出し、坐り込んで両手を地面に着く。

晋一郎「ま、参りました！」

無為齋、驚いた顔で晋一郎を見下ろす。

晋一郎「ご、御免！」

晋一郎、刀を拾い、駆け去る。

あっけにとられる門弟たち。

嘲り笑う声が徐々に広がる。

門弟たちの視線、大山に向けられる。

大山「いや、これは、その……いや、お邪魔  
いたしました。御免！」

大山、門弟たちを掻き分けるように走  
り去る。

門弟たち、大声で笑う。

無為齋「気の毒な男じゃ」

無為齋、のろのろと刀を収める。

渡辺、無為齋に駆け寄る。

渡辺「先生、お見事でございました」

無為齋「何を言うか。本当ならとつくにあの

世へ行っておったわ。全く気の毒な男よ」

渡辺「は？」

無為齋「疲れた。儂やもう寝る」

無為齋、よたよたと母屋のほうに歩き

去る。

○街道（夕）

人気がない夕焼けの田舎道。

晋一郎が、早い足取りで歩いている。

大山、後ろから追いかけてくる。

大山「なあ、おい、佐伯氏、ちよっと待て」

晋一郎「いや、大山さん、潮時です。もう止

めましょう」

大山「何を言う。今日はただ相手が悪かった

だけの事ではないか」

大山、後ろから晋一郎の肩を掴む。

晋一郎「いや……」

晋一郎、肩を揺らして大山の手を振り

払い、歩調を早める。

大山、晋一郎を追いながら

大山「大体、最初からあそこは嫌な気がした

のだ。それをお主が……」

晋一郎「違う……」

大山「まさか、あんなボロ道場に、お主でも

歯が立たぬじじいがいるとはな」

晋一郎「違うのです。大山さん、違う……」

大山「何が違う？」

大山、晋一郎の前に回り込む。

晋一郎、歩みを止める。

晋一郎「あの老人は、ただの老人。年老いた

田舎道場の主に過ぎない」

大山「何？ そうなのか。世に隠れた名人なのでは……」

晋一郎「（薄く笑う）大山さんにはそう見えませんでしたか」

大山「い、いや。俺には只のじじいと……」

晋一郎「その通りですよ」

大山「では、では何故だ。なぜお主が……」

晋一郎、いきなり刀を抜く。

大山、飛び退る。

大山「な、何をする！」

晋一郎「大山さん、私の刀の切っ先を見てください」

大山、要領の得ない顔で晋一郎の刀を見る。

晋一郎、刀を持つ手に力を込める。

切っ先、震えだす。

晋一郎、苦しげな表情。

切っ先、さらに大きく震える。

晋一郎「この様です」

大山「こ、これは……」

晋一郎「私には真剣が遣えないのです」

大山「なに？」

晋一郎「最初は、何とかこれを直そうと……」

晋一郎、刀を鞘に納めようとする。手が震え、ぎこちない納刀。

晋一郎の手元を見つめる大山。

晋一郎「道場破りも、そのための修行と思っています。だが……」

大山「真剣が遣えないだと……」

晋一郎「だけど大山さん、私はもうやめます」

大山「やめるって、なあ、佐伯氏……」

晋一郎「ここで別れましょう」

大山「何を言う。それはこ、困るではないか」

晋一郎「だから、私と共にいても、もう大山さんには何の得にもなりませんよ」

大山「いや、とにかく真剣を抜かねばよいではないか。さすれば……」

晋一郎「とにかく、もう嫌になったのです。ここまでです、大山さん」

早足で歩き出す晋一郎。  
大山、途方に暮れたように立ち尽くすが、すぐに晋一郎を追いかける。  
晋一郎は振り向かない  
夕日を受けて二人の影は長い。

○雑木林

蝉の声に満ちた夏木立の中、佐伯晋一郎が、一本の樗（けやき）の大木を背に、刀を抱くようにして座っている。手甲、脚絆の旅の身なりだが、全身埃にまみれている。

薄く目を閉じてはいるが、眠っている訳ではない。

顔の周りを一匹のカナブンが飛び回っている。目を閉じたまま、無造作に、しかし、目にも留まらぬ素早さで手を伸ばし、カナブンを捕まえる。下目使いに、手にしたカナブンを見る。目に力がない。だらりと腕を投げ出す。カナブンが逃げる。

遠雷。夏空を黒雲が覆っていく。辺りが薄暗くなる。稲妻。雨が落ち始める。頬を濡らす雨粒に、面倒くさげに目を開け、空を見上げる晋一郎。辺りを見回す。視線の先、木立の向こうに朽ちかけた祠。

雨が激しさを増す。刀を杖に大儀そうに立ち上がりかける。稲妻の煌めきの中、若い百姓女が祠の軒下に駆け込んでいくのが見える。それを見て再び座り込む晋一郎。  
祠の軒下で、手拭いで雨を拭っていた女が、晋一郎に気づく。視線が合う。驚いた顔の女。

雨が土砂降りとなる。女の姿が雨に霞む。繰り返し雷鳴と稲妻。

晋一郎、坐ったまま女に背を向ける。樗に落雷。轟音、閃光。晋一郎、気を失う。

× × ×  
蟬の声。雲が去った夏空を背景に、晋一郎を見下ろす百姓女、喜代（20）の顔。

喜代「死んでると思った……」

晋一郎「ああ。だが、どうも違うようだな」

仰向けのまま、傍らの櫓を見上げる。

幹が途中で折れ、薄く煙を上げています。

喜代「雷に打たれなさって死んだと……」

晋一郎、身体を起こしながら呟く。

晋一郎「それでもよかったのだが……」

喜代「あ、あの、だ、大事、御座いませんか」

晋一郎「ああ」

喜代「お立ちになれますか」

晋一郎「いや」

喜代、心配げな表情。

晋一郎「いや、腹が減って動けないのさ」

喜代「へえ……」

晋一郎「あまりにひだるくて、雨を避ける気にもなれなかった。情けない事よ」

喜代、晋一郎の腕を取って、肩を貸そうとする。

晋一郎「あ、いや、よいのだ。歩こうと思えば歩けるのさ。まだな」

晋一郎、ゆっくりと立ち上がる。

喜代、傍らに転がっている晋一郎の刀に目をやる。

晋一郎「おお、そいつを忘れてはいかん。

すき腹には厄介な荷物なんだが」

晋一郎、億劫そうに刀を拾い上げ、腰に差す。

### ○喜代の家全景

小川の流れる小さな谷あい、田と畑に囲まれた藁ぶきの一軒家。庭先で喜代が洗濯をしている。

### ○喜代の家の中

土間に接する板の間で、浴衣姿の晋一郎が、山盛りの麦飯を掻き込んでいる。

塗の剥げた箱膳に汁椀と漬物の皿。  
傍らの竹籠の中で、かいまきに包まれ  
た赤ん坊が眠っている。  
晋一郎、箸を止めて庭の喜代に声を掛  
ける。

晋一郎「そうか。連れ合いと姑を相次いでか。  
それは気の毒な」

喜代、洗濯物を干す手を止めず、背を  
向けたまま答える。

喜代「おっ母様んときはろくな弔いも出せん  
で……」

晋一郎「なんの。連れ合いが死んだ後では仕  
方ないさ」

喜代「へえ」

赤ん坊が泣きだす。  
うろたえる晋一郎。

晋一郎「お、おい、赤子が泣いてるぞ」  
喜代「へえ、乳を欲しがってるんです」

喜代、背を向けたまま、洗濯物を干す  
手を止めようともせず答える。

泣き止まない赤ん坊。

晋一郎、困惑の表情で赤ん坊の顔を覗  
き込む。何となく竹籠を揺らしてみる。

赤ん坊が一瞬泣きやむが、すぐにまた  
泣き出す。

繰り返し竹籠を揺らす晋一郎。そのた  
びに少しだけ泣き止む赤ん坊。

喜代、庭先から手を拭いながら上がっ  
てきて、赤ん坊を抱きあげる。

喜代「おお、松吉、よかったねえ。御客人に  
遊んでもらって」

喜代、胸元を寛げ、赤ん坊、松吉（六  
か月）に乳を飲ませ始める。

晋一郎、やや慌てて喜代に背を向ける。  
晋一郎「こ、この家にその赤子と二人きりか」

喜代「へえ」

晋一郎「そうか。大変だな」

喜代「いえ」

晋一郎「そうか」

晋一郎、立ち上がって縁側から外を眺

める。

庭の物干しに喜代の野良着、松吉のむつきと並んで晋一郎の小袖や野袴が干されている。

小さな谷には、他に一軒の家もない。

晋一郎「だが、寂しいだろう」

喜代「へえ」

晋一郎「旅に出て三年になる」

喜代「へえ」

喜代、晋一郎の後ろで、松吉を竹籠に寝かせ、膳を片づけている。

晋一郎「一人で他国を旅するのも、それはそれで心細いものだ」

喜代、晋一郎に近づきながら

喜代「なぜ？」

晋一郎「え？」

喜代「旅など」

晋一郎、無言で腕を組み、縁側から遠くを見つめたまま、答えない。

喜代、晋一郎の背中に頭を下げる。

喜代「差し出したことを……」

晋一郎「いや、いいさ。私は我が師を探しているのだ」

喜代「お師匠様？」

晋一郎「我が剣の師だ。師は三年前、突然、国元を出奔した」

喜代「そのお方を探して……」

晋一郎、板の間に戻り、松吉の籠を覗き込む。

松吉、満足そうな顔で晋一郎の顔を見返す。

晋一郎「お喜代さんの親御は？」

喜代「隣村の自前百姓でしたけれど……」

晋一郎「うん」

喜代「とうに二人とも……」

晋一郎「そうか」

喜代「へえ」

晋一郎、松吉の籠を揺する。

松吉、きやつきやと声を上げる

○喜代の家の中（夜）

晋一郎が縁側に座って外を見ている。

山の端に掛かる月。満天の星。

喜代、板の間に続く座敷の中で蚊帳を吊っている。

喜代「こちらに床を」

晋一郎「すまないな。行き倒れ同然を助けてもらった上に……」

喜代「いえ」

喜代、板の間に自分の夜具を運び、松吉の籠を持って戻る。

喜代「あの、松吉を……」

晋一郎「え？ ああ、そうか」

喜代「蚊帳が一張りしかなくて……」

晋一郎「うん、入れてやってくれ。私のせいで蚊に食われては可哀そうだ」

喜代「夜泣きはしないほうですから」

晋一郎「坊は利口そうだ」

喜代「いえ」

喜代、蚊帳の隅に松吉の籠を入れる。

縁側の晋一郎の周りに数匹の蛍。

晋一郎、何度か素早く手を動かす。

蚊帳に近づいて裾から手を入れ、握った拳を開く。掌から数匹の蛍が飛立つ。

喜代、目を見張る。

晋一郎「子供の頃、よく父にこうして貰った」

喜代「へえ」

晋一郎、蚊帳の中を飛び回る蛍を目で追っている。

晋一郎「私の父は自ら腹を切って死んだ」

喜代「え？」

晋一郎「私は、父の仇を討たねばならぬ」

差し込む月の光が苦しげな晋一郎の横顔を照らしている。

晋一郎「父の切腹の元は我が師にあるという」

晋一郎、膝の上の拳を握りしめる。

その横顔を、恐ろしげに見つめる喜代。

晋一郎「まこと、先生のせいならば、まこと、父が無念の思いを残したのなら……」

晋一郎の拳が震える。

晋一郎「その父の無念を……。私は、私は仇を討たねばならない」

喜代「お師匠様を……」

晋一郎「そうだ。だが、私には分からぬ。私は先生を憎まねばならぬのか。私に先生が討てるのか。この私に……」

訴えるように喜代を見る晋一郎。

痛ましげに晋一郎を見返す喜代。

### ○喜代の家の庭（夜）

月明りに照らされた庭。縁側の板戸は開け放たれていて、部屋の中に吊られた青い蚊帳が見える。その中で、白い影となつてもつれ合う晋一郎と喜代。庭には無数の蛍が飛び交っている。

### ○蚊帳の中

抱き合う晋一郎と喜代の足もとで、松吉が目を開ける。顔の傍を蛍が明滅を繰り返しながら飛ぶ。手を伸ばす松吉。何度も捕まえようとしますが、蛍は捕まらない。

### ○喜代の家・板の間

晋一郎が松吉を抱いてあやしている。

松吉、機嫌のいい声をあげている。

晋一郎、松吉を床に座らせようとする。

松吉、晋一郎が手をそつと放すと、坐

った形のまま倒れる。

晋一郎が慌てて手を添える。松吉笑う。

板の間から見える縁側で喜代が背中を向けて座繰り器を操り、繭から糸を取っている。

### ○喜代の家・縁側

喜代が糸を巻く座繰り器の前に座って、糸を繰っている。

傍らにお湯を張った桶。浮かんでいる二、三十個の白い繭から喜代が回す座繰り器に糸が巻き取られていく。

晋一郎、喜代の後ろに立ち、物珍しげにその手元を覗き込む。

晋一郎「ほう、絹糸とはこうして作るのか」

喜代、手を休めず答える。

喜代「へえ、佐久兵衛旦那のところの賃仕事で……」

晋一郎「内職というわけだ」

喜代「へえ」

くるくると回る座繰り器の小枠。

器用に撚りを掛けながら糸を導く喜代の指。

それを見つめる晋一郎。

「ああ、ああ」という松吉の声。

晋一郎、振り返り、板の間の奥を見る。驚いた表情。

晋一郎「おい、喜代。見ろ。松吉が這おうとしている」

喜代、手を止めて振り返る。

○喜代の家・板の間

床の上で身をくねらす松吉。喜代の方に近づこうとしている。

「ああ、ああ」と声を上げる。

○喜代の家・縁側

板の間の松吉を見た後、晋一郎を見上げ、笑う喜代。

笑い返す晋一郎。

○喜代の家・板の間（朝）

箱膳を前に朝食をとる晋一郎と喜代。

旺盛な食欲の晋一郎。

晋一郎に給仕しながら、考え込むような顔の喜代。

晋一郎「どうした、喜代」

喜代「晋一郎様、今日、濱次どんが来ます」

晋一郎「え、誰だって」

喜代「糸を集めにきます。佐久兵衛旦那のところの手代さんです」

晋一郎「え？ あ、ああそうか。私がこの家

にいと……」

喜代「へえ」

晋一郎「分かった。どこかへ行っているよ」

喜代「すみません」

晋一郎「なに、喜代が謝る事はないさ」

食事を続ける二人。

○河原

晋一郎、傘を被り、河原の岩に腰を下ろして釣りをしている。

竿がしなる。

晋一郎、竿を操って魚を釣りあげる。

日差しに煌めく山女魚。

釣りあげた山女魚を魚籠に入れる。魚

籠の中には数匹の山女魚。

晋一郎、釣竿をその場に置いて立ち上がる。

傘を取り地面に置く。

腰を沈め、刀の柄に手を掛ける。

思い詰めた表情。

刀を抜く。煌めく刀身。

何本か型を演じる。動きはぎこちない。

晋一郎、刀を納める。

○喜代の家・土間

裏口の引き戸が開き、釣竿と魚籠を持った晋一郎が土間に入ってくる。

喜代と男の話し声が聞こえる。

男の声「まあ、考えておいてくれや。お喜代さん。松吉も我が子と思うて育てるだから」

喜代の声「へえ」

男の声「じゃ、また来るだ」

喜代の声「へえ、気い付けて」

男の声「ああ」

晋一郎、釣竿と魚籠を置き、静かに裏口から出る。

○喜代の家・裏庭

裏口から出てきた晋一郎、回り込んで

家の陰から表のほうを見る。  
大きな風呂敷を担いで歩いていく中年  
の男の後ろ姿。

○喜代の家。板の間（夕）

囲炉裏に熾き火。

その周りに串に差された山女魚。

晋一郎と喜代の前に夕食の膳。

串のまま山女魚を齧る晋一郎と喜代。

無心に齧る喜代。

喜代の様子を窺う晋一郎。

駕籠の中の松吉が泣き出す。

喜代、前掛けで手を拭い、松吉を抱き

上げ、胸を寛がせて乳を飲ませる。

喜代を見つめる晋一郎。

○喜代の家・座敷（夜）

蚊帳の中、裸で横たわる二人。

喜代、上をむいたままで

喜代「晋一郎さま、いつまで、あの……」

晋一郎同じく上を向いたままで

晋一郎「うん？」

喜代「やがては、行ってしまわれるのですね」

晋一郎「……」

喜代「父上様の仇、討たねばなりませんか」

晋一郎「そうだな……」

喜代「お侍だからですか」

晋一郎「……」

喜代「わたしのお父うは、山仕事で足滑らし  
て死にました」

晋一郎「そうなのか」

喜代「へえ。でも、山相手に仇討ちはできま  
せん」

晋一郎「そうだな……」

喜代「晋一郎様はお侍だから、仇を討たねば  
ならない……」

晋一郎「いや……」

喜代「百姓の後家の家に、いつまでも居られ  
るわけがない……」

晋一郎、身を起こし、喜代の顔を覗き

込む。

晋一郎「いや、わたしは……」

喜代、晋一郎の顔に焦点を合わせず

喜代「それは仕方のない事……」

晋一郎「喜代……」

晋一郎、喜代に覆いかぶさる。

喜代、天井を見つめながら、晋一郎を抱きしめる。

喜代「仕方のない事……」

蚊帳の隅で駕籠に入れられた松吉が眠っている。

喜代の喘ぎ声が聞こえる。

○喜代の家・板の間（朝）

囲炉裏の前に朝食を載せた箱膳。

傍らに晋一郎の小袖と袴がきちんと折りたたまれて置いてある。

板襖が開き晋一郎が座敷から出て来る。

囲炉裏のまわりの様子を見る。

松吉の籠は空っぽ。

晋一郎、縁側に出る。

○喜代の家・縁側（朝）

晋一郎、縁側から外を見回す。

田の中ほどで、松吉を背負い、草取りをしている喜代の後ろ姿。

晋一郎、喜代を見詰める。

喜代、無心に草を取っている。

晋一郎、あたりを見回す。

低い尾根に囲まれた小さな谷。

家の前に広がる狭い田畑。

せせらぎとそれに沿う小道。

晋一郎、板の間に戻る。

○喜代の家・板の間（朝）

箱膳の上に食べ終えた朝食。

晋一郎、身支度をしている。

両刀を腰に差し、土間に下りる。

○喜代の家・玄関前

戸を開けて晋一郎が出てくる。  
あたりを見回すが、誰もいない。  
歩き始める。  
小道に出る前に振り返って家を見る。  
再び歩き始める。  
振り返らずに小道を下っていく。

### ○芒原

枯れた芒の原。雪が所々うっすらと積もっている。間近に魁偉な山容の岩山がそびえる。

その山に向かうまっすぐな道を、手甲、脚絆、野袴に道中合羽の晋一郎が急ぎ足で歩いている。背中に木刀の袋。遠くで男たちの怒号が聞こえる。

晋一郎、振り返る。  
十数人のヤクザ者が後方から追いかけてくる。

晋一郎、背中の木刀を取り出し、応戦の構えを取る。

追いついたヤクザ者たち、長ドスを構え、遠巻きに晋一郎を取り囲む。

一人のヤクザが怒鳴る。

ヤクザ1「渡世人にや渡世人の仁義つてもものがあるんだぜ。このまま見過ごす訳にや、いかねえんだ」

晋一郎「何が仁義だ。馬鹿馬鹿しい」

ヤクザ1「うるせえ。やっちまえ！」

晋一郎、落ち着いて木刀を構える。

ヤクザ達「お、おう……」

ヤクザ達、踏み込む事ができない。

ヤクザ1「何してやがる。相手は只の棒きれだ。とつとといかねえかい！」

ヤクザ1、となりにいた一人のヤクザの尻を蹴る。

蹴られたヤクザ、たたらを踏みつつ、叫びながら晋一郎に斬りかかる。

晋一郎、軽く躲すが、これをきっかけに、ヤクザ者たち、入り乱れて晋一郎に斬りかかる。

晋一郎、流れるような動きで、ヤクザ達を打ち据え、長ドスを叩き落としていく。

たちまち、半数ほど足や肩を打たれて倒れる。怯むヤクザ達。

長い竹槍を担いだ新手のヤクザ達、七、八人が駆けてくる。先頭のヤクザ2が叫ぶ。

ヤクザ2「だめだ、だめだ！ そいつ相手に

長ドスじゃ勝ち目はねえぞ」

ヤクザ1、声に振り向く。

ヤクザ1「おう、加勢が来たぞ」

竹槍を持ったヤクザ達、ヤクザ2の指

図で晋一郎を取り囲む。

ヤクザ2「そりゃ、突け！」

ヤクザ達、一斉に四方から晋一郎目にかけて突く。

晋一郎、竹槍を払うが、その長さのため、相手の手元には近づけない。

最初のヤクザ達も勢いを取り戻し、隙を見て斬りつける。暫く攻防が続く。

その間、竹槍や長ドスが何度か晋一郎の身体を掠め、いくつかの浅手を追う。

疲れを見せ始めた晋一郎にヤクザ1が斬り込む。晋一郎、思わずまともに木刀で受ける。木刀が両断される。

晋一郎、ややためらった後、木刀を捨て、刀を抜く。

思わず引き下がるヤクザ達。

刀を構える晋一郎。切っ先が震えている。あせりの表情。

竹槍のヤクザ、突いてくる。

晋一郎、竹を切りとばす。

再び怯むヤクザ達。

晋一郎、刀を振りかぶって威嚇した後、振り向いて駆け出す。

虚を突かれたヤクザ達、あわてて追う。晋一郎に肉薄したヤクザ1、背中目がけて切りつける。晋一郎の背中から血が吹き出す。

晋一郎、振り返ってヤクザ1を斬る。  
ヤクザ1の首が飛ぶ。ヤクザ達、怯む。  
晋一郎、むちゃくちゃに刀を振り回し  
ヤクザの群に飛び込む。

数人のヤクザ、顔を斬られたり、指を  
落とされたりする。反撃しようとした  
竹槍のヤクザ、手首を切りとばされる。  
ヤクザ達、狼狽して逃げ出す。

晋一郎、刀を振り回し、叫び声で威嚇  
しつつヤクザ達を追うそぶり。

ヤクザ達が逃げきった後に立ち尽くす  
晋一郎。

荒い息。刀を取り落とし、崩れるよう  
に倒れる。

うつ伏せに倒れた背中からは出血が止  
まらない。

雪が降ってくる。晋一郎の体に薄く積  
もり始める。

山伏姿の男(68)、どこからか現れる。  
顔には天狗の面。腰には大小の刀を差  
している。倒れている晋一郎のそばに  
膝まずいて、傷の様子を見たあと、そ  
の身体を軽々と担いで歩き出す。

○天狗の小屋外観(夜)

山の中腹にある粗末な小屋が月明りに  
照らされている。

戸や窓の隙間から明かりが漏れている。

○天狗の小屋中(夜)

気がつく晋一郎。あたりを見回す。

そまつな小屋の中。

囲炉裏の揺らめく炎が、室内を照らし  
ている。

炎の向こうに、山伏姿の男の背中。な  
にやらすり鉢で擦っている。

天狗「気がついたかの」

背中をむけたまま、籠もった声。

晋一郎「ここは……」

天狗「儂の城だ」

晋一郎「城？」

天狗「さあ、この辺でよかろう」

山伏姿の男、振り返る。古びた天狗の面。

晋一郎、目を見開く。傷がうずく。

天狗「おお、忘れておった」

天狗、面を取る。痩せた老人の顔が現れる。

天狗「身を起こせるのなら、背中を出せ。薬を代えてやろう」

天狗、すり鉢とぼろ切れを持って晋一郎のそばにくる。

晋一郎「あなたは？」

天狗「背中を出せ。薬を代える」

晋一郎、着せられていたボロのような浴衣を脱ぐ。

体に血が滲みたさらしが巻かれている。

天狗、さらしを取り、傷の手当てを始める。

天狗「お主を斬ったヤクザ者、なかなか肝の据わった奴と見えるの。切り口に迷いがない」

晋一郎「そうだ、村を仕切っていた連中と争いになって、追われた挙げ句……」

天狗「じゃが、お主も妙な男よの。あれだけの腕を持ちながら、刀を抜いたとたん、この様だ」

晋一郎「あなたが助けてくれたのですか」

天狗「何も覚えておらんのか」

晋一郎、頭を振る。

晋一郎「竹槍で突かれたことしか……。いや、違う。刀を抜いて、そして……」

晋一郎、目をつぶる。

晋一郎「助けて下さったのですね」

天狗「違うな」

晋一郎「え？」

天狗「儂や見物してただけじゃ」

天狗、手当てを終え、部屋の隅から貧乏徳利と欠けた碗を持って囲炉裏の向こうへ戻る。

天狗「(呟くように)あの剣捌きなら、ヤクザ者が何人掛かろうと大事なと思うたに、案外じゃった」

天狗、徳利から酒を注いで呷る。

晋一郎「あの、あなたはどなたですか」

天狗「儂か？ 儂や天狗じゃ。この山を住処としておる」

晋一郎「戯言を」

天狗「嘘ではないぞ。儂はかれこれ十二年ほど、この山で天狗をやっておるのじゃ」

晋一郎「なんと」

天狗「それだけやれば、例え、元は人であるうと、もう立派な天狗様よ」

天狗、笑いながら、再び酒を飲む。

天狗「それより、お主、この辺りの者ではないな」

晋一郎「はい」

天狗「それがなぜヤクザと喧嘩なんぞしておったのじゃ」

晋一郎「いや、なに、詰まらぬことです。賭場のいざこざで」

天狗、晋一郎を見つめる。

天狗「ふん、そうか。まあ、それはよい。よいのだが……お主、その若さで、あのような者たちと関わってはいかんぞ」

晋一郎「はあ」

天狗「いや、その、何じゃ。剣が、そう、剣が荒れる。ヤクザの喧嘩に使うには、惜しい腕じゃ」

天狗、気が付いたように笑い出す。

天狗「おっと、いかん。天狗が人に説教垂れるのも異なものじゃな」

晋一郎「はあ」

天狗「まあ、暫くここで養生をしていけ。うん、そうじゃ、そうしろ。その傷で動けば傷口がふさがらんぞ」

天狗、嬉しそうに酒を飲む。

○天狗の小屋外観  
冬晴れの空。

小屋の屋根や、地面に薄く雪が積もっている。

○天狗の小屋の前

戸が開いて、晋一郎が出て来る。まぶしそうな表情。周囲を見回す。頂に雪を載せた険しい山々が続いている。

小屋の上ってくる道を見下ろす。その道を天狗が登ってくる。背に天狗の面、手に兎。

天狗、晋一郎に気づく。

天狗「おお、起きてきたか」

晋一郎「はい。もういいようです」

天狗「そうか。早かったの。ほりゃ、獲物じや！」

兎を振って見せる。

○天狗の小屋・中（夜）

囲炉裏の前に晋一郎と天狗。

囲炉裏には鍋が煮えている。

天狗の膝元に酒の徳利と椀。

天狗、鍋をかき混ぜる。

天狗「ふむ。頃合いじやろう」

椀に盛って、晋一郎に差し出す。

天狗「ほれ、食べ。獣肉は薬じや。精が付く」

晋一郎「はい」

晋一郎、椀を受け取るが、すぐわきに置き、両手をついて頭を下げる。

晋一郎「未だ名を明かしては頂けません、

天狗殿。お助け頂きありがとうございます」

天狗、慌ててそっぽを向き、酒を椀に注いで呷る。

晋一郎の声が聞こえていないかの様に

天狗「うん。そうじや。傷は癒えても、足な

ぞは弱っておるじやろうな」

晋一郎「え？ あ、はい、まあ、そのようです  
すが……」

天狗「明日から儂と共に山を歩け。岩魚の住む川もあるし、眺めのよきところもあるぞ。

足腰の鍛錬になるう」

晋一郎「い、いえ、いつまでも御厄介になるわけには……」

天狗「いや、そうせい、そうせい。遠慮はいらん」

晋一郎「はあ……」

天狗、晋一郎に目を合わそうとせず、鍋や囲炉裏の火加減を見る。

### ○岩場

崖のような岩だらけの斜面。

岩から岩へ飛び移るように登っていく天狗。

岩に手を掛け、覚束ない足取りで天狗の後を追う晋一郎。

晋一郎を見下ろして無邪気に笑う天狗。苦しそうに天狗を見上げる晋一郎。

### ○小川

谷あいを流れる小川。所々に氷が張っている。

天狗、四つん這いになって、小川の淵に目を凝らしている。

傍らに立つ晋一郎。

天狗、静かに手を差し入れる。

その手に目を凝らす晋一郎。

天狗、暫くの後、素早く手を引き上げる。その手に身をくねらす岩魚。

天狗、立ち上がり、岩魚を魚籠に入れて晋一郎を見る。

晋一郎、跪き、水面を覗む。

目にも留まらぬ速さで手を水中に差し込み、引き上げる。その手に岩魚。

目を丸くする天狗。

顔を見合わせ笑う二人。

### ○山頂（夜）

岩山の狭い頂。

満天の星空。

胡坐をかいてその頂きに腰を下ろして

いる人影は晋一郎。  
物思いに沈んでいる様子。  
立ち上がり、腰を落として構える。  
無言で刀を抜く。一振りして鞘に収める。その動作を何度も繰り返す。  
やがて、動きが徐々に速くなる。  
星明りに煌めく刃。  
裂帛の気合い、夜空に射する。  
星が流れる。

○天狗の小屋・中（朝）

筵の上で眠っている天狗。寝相が悪い。  
晋一郎、戸を静かに開け、入ってくる。  
天狗を起こさぬように横になり、目を閉じる晋一郎。  
天狗、晋一郎に背を向けて横になったまま、

天狗「このところ毎夜じゃな」

晋一郎、横になったまま、目を開ける。

晋一郎「起してしまいましたか」

天狗「なんぞ掴めたかな」

晋一郎「分かりませんが、夜の山は何かを感じさせるような気が……」

天狗「修行のために、山に籠る者もおるとい  
う。山の気が新たな境地に導いてくれる事  
があるのやもしれん」

晋一郎「天狗殿は、なぜここにいますか」

天狗「何、儂か？」

晋一郎「はい」

天狗「そうじゃな……」

天狗、暫く無言。

晋一郎「天狗殿……」

晋一郎、半身を起して天狗を見る。  
天狗、横になったまま、背を向けて答  
える。

天狗「儂や逃げておる」

晋一郎「逃げる？」

天狗「いや、違うな。閉じ込めておるのよ。

この山に、我が身をな」

晋一郎「どういふことですか」

天狗「すき好んでここにおる訳ではないとい  
う事じゃ」

晋一郎「それは……」

天狗「顔を曝すのも厭い、天狗の面で顔を隠  
し……（欠伸をしつつ）眠い。今少し寝か  
せよ」

晋一郎、天狗の背中を見つめる。

背を向けたまま、寝息を立て始める天  
狗。

○天狗の小屋の前（夕）

天狗、岩魚を縄に絡げて小屋に戻って  
くる。

戸を開けて、小屋に入る。

すぐに、出て来て辺りを見回す。

小屋を一回りする。

落ち着かない様子。

晋一郎の声「天狗殿！」

天狗、声のした方を見る。

小屋に至る小道を晋一郎が登ってくる。

背中に小振りの酒樽。

天狗「どこへ行っていたのじゃ！」

晋一郎「麓の村です！」

天狗、訝しげな顔で歩いてくる晋一郎  
を見る。

天狗「（呟く）村じゃと？」

晋一郎、坂を上がり切り、天狗の前で、  
背中の酒樽を見せる。

晋一郎「麓へ下りて、酒を求めて参りました」

天狗、酒樽を見て驚くが、すぐ嬉しそ  
うな顔になる。

天狗「おうおう、それは気の利いたことよ」

晋一郎、天狗がぶら下げている岩魚を  
みる。

晋一郎「ちようどよかった。そいつで一杯や  
りましょう」

晋一郎、さっさと小屋に入っていく。

天狗「お、おう」

天狗、晋一郎の後を追って小屋に入る。

○天狗の小屋・中（夜）

囲炉裏の火の回りに枝に刺した岩魚が並べられている。

向かい合って座る晋一郎と天狗。

二人の前に酒が注がれた椀。

晋一郎、椀を持ち、軽く捧げる。

晋一郎「では」

晋一郎、椀の酒を飲み干す。

天狗「おう」

天狗、戸惑い気味に椀を取り、口を付ける。すぐに笑顔になる。

天狗「こりゃいい酒じゃな」

天狗、酒を飲み干す。

晋一郎、その様子を見てから椀を置き、両手を付き、頭を下げる。

晋一郎「天狗殿、長い事お世話になりました。この辺りでお暇しとう御座います」

天狗、驚いて口の周りに着いた酒を拳で拭う。

天狗「ふん、なんじゃ。これは暇乞いの酒であつたか」

晋一郎「は、せめてもの礼にと思ひ……」

天狗「詰まらんの。もう往ぬるのか」

晋一郎「はい、傷も癒え、足腰も元に戻りました故」

天狗「何処へ行く」

晋一郎「それは……」

天狗「当てがないなら、今暫く、この山におればよいではないか」

晋一郎「いえ、そういう訳には」

天狗「詰まらぬのう」

晋一郎「いつまでも御厄介になつては……」

天狗「何が厄介だ。儂が頼んでおるのじゃ。この山に籠って十二年。日頃は鳥や獣と話すばかりじゃった。久方ぶりに人の話し相手が出来たと思うたに、まったく詰まらぬのう」

ため息を付き、岩魚を取って齧り付く天狗。

晋一郎、暫く天狗の様子を見た後に口

を開く。

晋一郎「実は、仇を追っています」

天狗「な、なんと」

天狗、岩魚を口に入れたまま、手を止める。

晋一郎「国を出てこの四年、諸方を訊ね歩いておりました」

天狗、岩魚を飲み込む。

天狗「(咽つつ)して、手がかりは……?」

晋一郎「実は、この隣国に、仇の知る辺がいるやもしれぬという噂を聞いています」

天狗「知る辺とは?」

晋一郎「名は分かりません。何でも、仇と同名とか……」

天狗、不機嫌そうに岩魚に齧り付きながら、

天狗「同じ道場で修行したか」

晋一郎「はい、江戸の道場と聞いてきました」

天狗「止めておけ」

晋一郎「は?」

天狗「仇討ちなぞ詰まらんことだ」

晋一郎「そう思われるかもしれませんが……」

天狗「詰まらんぞ。まこと、詰まらんのだ」

天狗、徳利から酒を呷る。

晋一郎「父の仇です。諦めるわけにはいきません」

天狗「誰の仇であろうと同じ事じゃ。仇討ち

なぞするものではないぞ」

晋一郎「そうはいきません」

天狗「愚か者め!」

徳利を叩きつけるように置く。

晋一郎「愚か者とは……」

天狗「いいか。よく聞け。四年探して見つからん。では何年探すつもりじゃ」

晋一郎「そ、それは……」

天狗「十年か、二十年か。それでも見つからん時はどうするつもりじゃ」

晋一郎、目を伏せる。

天狗「その若さで、一生を棒に振るつもりか。愚かとは思わぬか」

晋一郎、顔を上げ、天狗の目を鋭く見つめる。

晋一郎「仇討ちは、ただ、私の存念でいたすものです。自らの一生をいかに生きようと、天狗殿には関わりがなからうと存じます」

天狗、晋一郎の視線を受け止めかねて、気弱げに、

天狗「いや、その、愚か者というたは濟まなんだが……」

晋一郎「いえ、確かに愚か者かもしれませんが、ですが、口出しはご無用に願います」

天狗「いや、まあ、そうじゃな。確かにそうじゃ。余計なことを云うた。じゃが……」

晋一郎「天狗殿には、この一命をお救い頂きました。御恩は忘れません。なれど……」

天狗「いやいや、儂は、別に恩を着せようと思つた訳ではないのじゃ。そう、この齢になると、何やら人恋しくなつての。じゃから、傷ついたお主を拾つてみた。それだけの事じゃ。それだけの……」

晋一郎「申し訳ございません」

天狗「じゃがな、袖揃り合うも他生の縁。とにかく、一度は助けたお主が、仇討ちなんぞで命を落とすかと思つと、なにやら無念な気がするのじゃ」

晋一郎、驚いた表情で天狗を見る。

晋一郎「私が敗れると……」

天狗「多少、遣える者なら、今のお主を倒すのは容易い」

晋一郎「天狗殿……」

天狗「背中の傷を忘れたか。あれほど見事な腕を持ちながら、刀を抜いた途端、ヤクザ一匹倒すのがやつとだったではないか」

晋一郎、俯く。きつく握つた両の拳が震えている。

晋一郎「私は、私はそれでも……」

天狗「何があつたかは知らん。じゃが、負ける戦をしに行くことはないと思つたのじゃ」

晋一郎「ですが……」

天狗、晋一郎の顔を見、ふと我に返つ

た様子で

天狗「いや、そうじゃな。世を捨てて、天狗となつた儂が口を出すことではなかつた。

ああ、そうじゃ」

肩を落し、酒を呑む天狗。

天狗を見つめる晋一郎。

二人、暫く無言で酒を呑む。

晋一郎「仇は、我が剣の師であります」

天狗、晋一郎の声も耳に入らない様子で酒を呑んでいる。

晋一郎、構わず言葉を継ぐ。

晋一郎「我が父は、この師と立ち合つて敗れ、腹を切りました。私は、私はこの手で父の介錯を務めました」

天狗、目を上げ、晋一郎を見る。

晋一郎、自分の両の掌を広げ見つめる。手が震えている。

晋一郎「この手で我が父の首を落としたその時から、私は真剣が使えなくなりました」

天狗「……！」

晋一郎「私は幼少のころより、師の下で、剣の道を究めようと修行に励んでいました。

この師の元でなら、それは叶うと信じられたからです。けれど、この時以来、全てが虚しくなりました」

天狗「お主……」

晋一郎「天狗殿は、一生を棒に振るなど申されました。仰せのとおり、私も一度は、仇討ちなど諦めて生きようと思つた事がありました」

天狗「ならば……」

晋一郎「だけど、できなかつた」

天狗「なぜじゃ」

晋一郎「そ、それは……。ならば、どう生きて行けばよいのですか。ただ、今一度、師と相見える事だけが、今の私の生きる標と思えてならない……」

天狗「お主、その師匠と立ち合うのか」

晋一郎「師は、自ら自分が父の仇であると書き残して立ち去りました」

天狗「お主、死ぬぞ」

晋一郎「父は死ぬべき時に死ぬのが武士だと  
言い残しました」

天狗「そうか、そうなのか……」

天狗、痛ましげに晋一郎を見る。

晋一郎、自分で腕に酒を注いで一気に  
飲み干す。

晋一郎「天狗殿、私はとにかく行きます。こ  
こに留まる事は、決してできない」

天狗「分かった。もう止めまい」

二人、再び無言で酒を呑む。

囲炉裏の岩魚が焦げている。

天狗、ふと思いついた顔で聞く。

天狗「して、お主の……、お主のその師匠と  
はどのような方か」

晋一郎「はい。脇坂先生、脇坂彦衛門と申し  
ます。二十数年前、漂泊の中で一流を開か  
れ、我が御城下で流派の名を掲げられまし  
た」

天狗の目が見開かれる。

晋一郎、それには気づかず、囲炉裏の  
炎を見詰めている。

### ○山道

獣道のような山道。

前を歩く天狗。その背中に天狗の面。

後ろを歩く晋一郎。

無言で歩く二人。

### ○峠

晋一郎と天狗、藪の中から尾根を越え  
て行く峠道に出て来る。

道が尾根の頂きに差しかかるところは、  
平地になっている。

天狗、立ち止まり、道の先を指さす。

天狗「この峠を下れば、隣国の城下じゃ」

晋一郎「はい、御恩は一生……」

天狗「いや、儂の事など忘れよ。儂もお主の  
事を忘れる事にする」

晋一郎「え？」

天狗、背中の面を前に回し、顔に付ける。無言で、峠の端の見晴らしの利く場所まで歩いていく。

晋一郎、天狗と並んで立つ。

眼下に山の麓から広がる田や畑、遙か遠くに一筋の川。川の畔に小さな城下町が見える。

天狗、前を向いたまま言う。

天狗「儂の名は大和田重蔵という」

晋一郎「え？」

天狗「ここから見える、あの小さな城下に我が家がある」

晋一郎「天狗殿……」

天狗「十二年前、儂はここに立ったが、峠を下ることはできなかった」

晋一郎「？」

天狗「甥を二人死なせた」

晋一郎「え？」

天狗「上が十七、下が十五じゃった」

晋一郎「……」

天狗「仇討ちじゃ。馬鹿な事をした」

晋一郎「なんと！」

天狗「儂は二人の甥の介添えとなって仇を追った。容易く考えておったのじゃ。甥共に仇を討たせて、妹の家の家名を残してやろうとな」

晋一郎「天狗殿……」

天狗「愚かじゃ。儂は愚かじゃった」

面の中で泣いている天狗。

天狗「どの面をさげて、国に、家に帰る事ができよう。妹の顔を見る事ができよう。帰れぬではないか」

晋一郎、天狗の面を見つめる。

天狗「じゃから、儂は天狗になった。故郷を

見下ろすこの山で、顔を曝すことさえ厭い、

十二年……」

晋一郎「天狗殿……」

天狗「お主を拾うたは、言うた通り、ただの気まぐれじゃ。じゃが、儂も、もう飽いておったのじゃ。世を捨てた暮らしにの」

暫く遠くを見る様子で、無言のまま佇む天狗。

共に遠くを見る晋一郎。

天狗、晋一郎に向き直る。

天狗「別れる前に一つ頼みがある」

晋一郎「何でしょう」

天狗「儂の前でその刀、抜いてみてくれんか」

晋一郎「は？」

天狗「手向けじゃ。お主の太刀筋を見てやろう。そう、真剣を遣えるようになったかどうかをな」

天狗、真剣な表情。

天狗「山の頂で何事か搦んだのではないのか。

じゃから降りる事にした……」

晋一郎「いえ、ですが……」

晋一郎、躊躇いつつ答える。

晋一郎「わかりました。では」

晋一郎、数歩下がり、足場を固め大刀を抜き放つ。

天狗、間髪を入れず、刀を抜き、斬りかかる。

辛うじて受ける晋一郎。刀と刀がぶつかる音が山に飴する。

飛び退る二人。

晋一郎「何をするのです！」

晋一郎の剣先、微かに震えている。

天狗「我が名は大和田重蔵！ お主が探して

おる者じゃ」

晋一郎「！」

天狗「江戸で、彦衛門と同門であった」

晋一郎「そ、そうでしたか」

天狗「己の甥をむざと見殺しにした儂じゃ。

ここで我が友を狙うお主を、黙って通す訳にはいかんのじゃ」

晋一郎「て、天狗殿……」

晋一郎、構えを解き、天狗に歩み寄ろうとする。

天狗、構わず斬りかかる。

晋一郎、辛うじて避ける。

晋一郎「天狗殿！」

天狗「頼む、勝負してくれ」

天狗、隙のない正眼。面の中から悲痛な声。

晋一郎、構えを解いたまま、天狗に向き合う。

天狗、構えたまま晋一郎の周囲をじりじりと回る。

天狗「昨夜、お主が寝込んだところで刺し殺そうかとも思ってた」

晋一郎「そうですか」

天狗「思うたが、儂も若き頃は彦衛門と共に剣の道を求めた者。お主とは尋常な立ち合がしたい」

晋一郎「ですが……」

天狗「躊躇うな。儂を思え。死ぬべき時に死ねなかつた男。今さらこの齡で惜しむ命ではないのじゃ。友の為に戦わせてくれ」

晋一郎、天狗の面を見つめる。

晋一郎「分かりました」

静かに太刀を構えなおす。切っ先が震える。

天狗、すかさず打ち込む。晋一郎、身をおかす。

天狗、間を置かず、俊敏な動きで打ち込んでくる。

晋一郎、天狗の激しい打ち込みを受け続ける。

天狗、動きを止め、晋一郎と対峙。

面越しに荒い息使い。

晋一郎の息も荒い。

晋一郎、息をゆっくり整えつつ、左半身をさらす上段に構える。

振りかぶった切っ先が震えている。

天狗、切っ先で晋一郎の喉を狙う。

天狗「(甲高い気合い)」

晋一郎「(気合い)」

天狗、晋一郎の喉に狙いを付けたまま、横に動く。

晋一郎、天狗の動きに応じて向きを変える。

天狗、身を沈め、鋭い突きを入れる。  
晋一郎、辛うじて身体を開いて躲し、  
駆け抜ける天狗の背に刀を振り下ろす  
が届かない。

天狗、機敏に振り返り、正眼。

晋一郎、再び上段。

天狗「(息を切らしながら)その上段、誰に習  
ろうた。彦衛門ではあるまい。上段を遣う  
者、漲る気で相手を押し返さねばならん。  
それではいくらでも突けるぞ」

○佐伯家道場(フラッシュ)

木刀の切っ先がゆっくり晋一郎の喉に  
近づき、首の横を、喉を貫く形で通り  
過ぎる。

玄之丞の声「堪えよ、晋一郎！」

○元の峠

天狗、晋一郎の喉に狙いを付けたまま、  
間合いを詰めてくる。

天狗「(気合い)」

晋一郎の上段の切っ先の震えが止まる。  
天狗、再び突こうとする。

晋一郎、先を取り、踏み込みつつ刀を  
振り下ろす。

天狗の面、両断される。天狗の驚きの  
表情。

晋一郎、返す刀で天狗の胴を切り上げ  
る。

天狗の身体が宙に浮き、後ろに倒れる。

晋一郎、残心を取ったまま動かない。

晋一郎の目から一筋の涙。

○天狗の小屋全景

戸が開き、鍬を持った晋一郎が出て来  
る。振り返りもせず道を下っていく。

天狗の小屋から煙。やがて炎が上がり、  
激しく燃え始める。

○峠(夕)

晋一郎、天狗と共に麓を見下ろした場所  
に穴を掘っている。  
穴を掘り上げた晋一郎、天狗の遺体を  
抱いて来て、穴に納めようとする。  
天狗の遺体から脇差が落ちる。  
死体を穴に納め、脇差も共に納めよう  
とするが、思い止まる。  
天狗の遺体の胸に両断された天狗の面  
を置き、土をかけ始める。  
一心に穴を埋め戻す晋一郎。表情のな  
い顔。

× × ×

盛り上がった土の上に、墓石に見立て  
た岩。

晋一郎、墓に手を合わせ、瞑目する。

涙が静かに流れる。

墓に背を向け歩き去る。

墓が夕日に赤く染まっている。

### ○路上

城下町の街中。

商店が立ち並び、荷車や荷を背負った  
商人、買い物をする町人で賑わってい  
る道。

小ざっぱりとした旅姿の晋一郎が、通  
りがかりの者に道を尋ねながら歩いて  
いる。

### ○別の路上

武家屋敷の並ぶ人気のない道。左右に  
続く築地塀。

左右を見ながら歩いていく晋一郎。  
門番のいる大きな門の前で立ち止まり、  
道を聞く。

### ○大和田重蔵屋敷門前

小さな瓦屋根のついた古びた門。屋根  
の瓦は所々落ちている。

晋一郎、少しの間、閉ざされた門扉を  
見つめ、開け放たれている潜り戸から

中に入っていく。

○大和田重蔵屋敷玄関

晋一郎、三和土に立って奥に声を掛ける。

晋一郎「御頼み申す。もーし。御頼み申す」

奥から、大和田楓（17）が出て来る。

式台に座り、不思議そうな顔で晋一郎を見上げる。

藤「どちら様でございましょうか」

晋一郎「佐伯晋一郎と申します。旅の途中で

大和田重蔵殿と知り合うたものです」

藤「え！ お祖父様と……」

楓、驚きの声を上げる。

○大和田家客間

庭に面した十畳ほどの座敷。

障子が開けられ、縁側越しに手入れされた小さな庭。植込みの小振りな梅が赤い花を咲かせている。

下座に座る晋一郎。

対面して大和田松（59）と楓が並んで座っている。

その間に、重蔵の脇差が置かれている。脇差を見つめる松と楓。無表情な松、怒りに震える顔つきの楓。

松「（脇差を見つめたまま）それで、夫、重蔵は、あなたが斬ったと……」

晋一郎、淡々と答える。

晋一郎「はい」

松「（脇差を見つめたまま）それで、この脇差は形見だと」

晋一郎「始めは、共に埋葬しようと思ったのですが……」

松「互いに遺恨があった訳ではない、尋常の勝負であったと……」

晋一郎「はい」

松、顔をあげる。

松「それ故、この家の門を潜れたというのですか」

晋一郎「いえ……、その、天狗、いや大和田殿には命を救っていただきました」

松「……」

晋一郎「そればかりではなく、山中で共に暮らす内、友のようなものになったといつていいと思います」

松「それでも斬ったと……」

松、晋一郎ににじり寄る。

晋一郎「申し上げたように、大和田殿は、私が大和田殿の友を仇として追っている事を知り、斬らねばならぬと思われました。だが、私はどうしても斬られる訳にはいかない。避けられなかったのです」

松、射るような視線で晋一郎を見る。

晋一郎、静かに松の視線を受け止める。

晋一郎「お恨みは甘んじて受けますが、ともかく、消息をお知らせせねばと……」

松、片手を付き、肩を落す。

松「そうですか。仔細はともかく、武士が互いに己の信じるところに従ったのであれば、今更、何も申し上げる事はございません」

晋一郎、両手を突き、軽く頭を下げる。

晋一郎「お言葉、痛み入ります」

松「こちらこそ、形見の品、お届け頂きましてありがとうございます。実のところ、わたくしは、とうに諦めておりましたのに」

晋一郎「大和田殿は山中に潜みながら、国に帰りがたっておられました。ただ、甥御二人を死なせた事が如何にも重く、ついに……。それで、せめて脇差だけでも……」

松「夫は、以前より軽忽なところのある人でした。仇討ちの事も藩内随一の遣い手と煽てられた故でございます」

晋一郎「大和田殿も悔いておられました」

松「遅いのですよ。わたくし共を捨てて十二年、便りもなく、生死さえ分からず、聞けば己の面子の為に山に籠り……」

楓、いきなり形見の脇差を掴むと、鞘を払い晋一郎を突く。

楓「(悲鳴のように)お祖父様の仇！」

晋一郎、片膝を立てただけの動きで楓の突きをかわす。

楓、勢い余って畳に突っ伏すが、すぐに起き上がって再び、晋一郎を突く。

晋一郎、脇差を抜き、楓の突きを跳ね上げる。

形見の脇差、天井に突き刺さる。

楓、晋一郎に躍り掛かり、首を絞める。

楓「お祖父様を……。よくも、よくも！」

晋一郎、暫くの間、されるがままになっっている。

晋一郎の顔が赤くなっていく。

晋一郎、楓の手を取り、静かに首から引きはがす。

楓、もがくが抵抗できない。

晋一郎、楓を突き放す。

畳に突っ伏す楓、号泣する。

晋一郎、首筋をさすりながら言う。

晋一郎「申した通り、私も仇を追う身。いまここで討たれる訳にはいかないのです」

晋一郎、手を伸ばして、天井の脇差を抜くと、何事もなかったかのように鞘に納め、元の通りに置く。

楓、立ち上がる。

憎しみの籠った目で晋一郎を睨むと、

音高く襖を開け放って部屋を出ていく。

松、襖を閉じる。

松「お赦してください。あれは、夫にはごく懐いておりましたゆえ」

晋一郎「はい」

松「あれの母親は嫁ぎ先に離縁され、出戻っておりますが、十年ほど前に病を得まして、あっけなく……」

晋一郎「そうですか」

松「それゆえ心細かったのです。なおさら、夫の帰りを待ちわびておりました」

晋一郎「そうでしたか……」

松「ともかく、御無礼いたしました」

晋一郎「いえ。では私はこれにて……」

晋一郎、頭を下げ立ち上がる。とする。

松「お待ちください」

松、目を閉じ、大きく息を吸う。

松「脇坂殿は、江戸は新川という所で手習い指南所を開いるとのことです」

晋一郎「え？」

晋一郎、坐り直し、松の顔を見詰める。

松「三年ほど前に夫宛に文が来たのです。あなたが探し求めているのは、脇坂彦衛門殿なのでしよう」

晋一郎「は、はい。どうしてそれを……」

松「夫が命を懸けて守ろうとしたのであれば、脇坂殿しかありません。江戸での遊学の折り、義兄弟の縁を結んだとか」

晋一郎「よくお教え下されました。では御免」

晋一郎、立ち上がり、襖を開ける。

襖の陰に楓が立っている。

晋一郎、楓に目礼して立ち去る。

楓、座敷に駆け込む。

楓「お祖母様！ なぜあの者に脇坂様の居所などを……」

松、楓を目で制し、座らせる。

玄関を窺いつつ

松「脇坂殿は稀代の名人と聞いております。

あの者と出遭えば、お祖父様の仇を討ってくれるやもしれません」

楓「お祖母様……」

松「楓、お祖父様を倒したほどの者です。お前や私がどうこうできる相手ではありません。この上は、脇坂殿が頼りです」

楓「で、では、お祖母様も仇討ちを……」

松「楓、恨みではありませんよ。仇討ちは武門の習いです。このまま手を拱いていたのでは、女だけの家のことよと大和田の家が侮られます」

楓「は、はい」

松「では、脇坂殿に文を書きましよう」

楓「文？」

松「あの者に伝えた通り、脇坂殿は新川の山形屋という酒問屋に身を寄せておられます」

楓「はい。江戸の新川……」

松「脇坂殿が、よもや後れを取るとは思いませんが、知らせておけば、不意打ちも防げましょう」

楓「お祖母様、その文、わたくしが届けます。ぜひともわたくしを江戸に」

松、楓を見詰める。

松「そうですか。成程、それもよいでしょう。

楓、大和田の家の者として、脇坂殿が、あの者を討つの見届けてくるのです」

楓「はい」

松「ただし、構えて先程のように手をだすのではありませんよ。いいですね」

楓「わかりました」

松「では、忠助を共に付けます。すぐに支度を。時がありませんよ」

楓「はい、直ぐに」

楓、立って部屋を出て行く。

#### ○山形屋・裏庭全景

板塀に囲まれた庭。

小さな離れがあり、中から脇坂が子供たちに手習いの稽古をしている声が聞こえる。

#### ○同・離れ室内

脇坂が子供達の字を直して回っている。庭から晋一郎の声。

晋一郎の声「御免、佐伯晋一郎でござる。大和田殿の妻女からこちらと伺い、罷り越しました」

脇坂、子供から離れ、縁側に出る。

#### ○同・裏庭

脇坂、縁側に出てくる。板塀に開いた木戸を背に晋一郎が立っている。

脇坂「晋一郎か。久しいの。四年振りか。ま、とにかく、子らの稽古が済むまで暫し待たれよ」

脇坂、何事も無い様子で部屋に戻る。

○同・離れ室内

脇坂、再び子供達に教え始める。

障子に晋一郎の影。近付いてきて縁側に腰を下ろす様子。

脇坂、影にちらりと目を遣るが、そのまま子供たちの相手をつづける。

\* \* \*

稽古が終わり、子供達、我先に縁側から出て行く。

脇坂、暫く座ったまま、障子に映る晋一郎の影を見詰めている。

脇坂、左手に太刀を持って立ち上がる。

○同・裏庭

脇坂、縁側に出てくる。

晋一郎、脇坂の持つ刀に目を遣る。驚いた様子で跳び退り、身構える。

脇坂、無言で刀を抜いて縁側から跳び上がり、空中から晋一郎めがけて振り下ろす。

低い腹に響く気合。

晋一郎、前方に身体を投げ出し、脇坂の打ち込みを避ける。素早く立ち上がり振り向き様に刀を抜く。

晋一郎、正眼。脇坂、上段で対峙。暫く睨み合う二人。

晋一郎、静かな表情。

脇坂、晋一郎を見て微かに驚く。

脇坂、だらりと刀を下ろす。

脇坂「やはり、止めておこう。此処で遣り合っても、この家の者に迷惑」

晋一郎、頷いて刀を納める。

晋一郎「それが宜しいかと存じます。私も尋常の勝負によって本懐を遂げたいと思っておりますゆえ」

脇坂「言っておるわ。では、場所と刻限を定めよ、晋一郎」

晋一郎「なれば、明後日の夜明け、場所は浅茅が原。総泉寺門前にてお待ち申します」  
脇坂「承知」

晋一郎「では今日はこれにて。御免」

晋一郎、木戸に向かう。

脇坂、晋一郎の背中に声を掛ける。

脇坂「晋一郎、強うなったな」

晋一郎、立ち止まる。振り向かずに返事をする。

晋一郎「はっ」

晋一郎、急ぎ足で去る。

抜き身の刀を持ったまま見送る脇坂。

離れの陰から楓が現れる。

楓「脇坂様……」

脇坂「見ていたか。やはり、来たな」

楓「はい」

脇坂「あやつ、ただ腕を上げただけではないな。この四年、どうしておったのか……」

楓「脇坂様、明後日の立合い、この楓に一太刀なりと……」

脇坂「馬鹿者！」

身をすくめる楓。

脇坂、縁側に転がっている鞘を拾い、刀を納める。

脇坂「この勝負、わしと晋一郎だけのものだ。

余人を交えるつもりはないといったはず」

楓「で、でも、お祖父様は脇坂様を守ろうと……」

脇坂「くだい。重蔵殿の気持ちはありがたいが、筋が違う。いや重蔵殿も、そんなことは承知だったろう。やはり、己の中の、何事かを懸けて戦ったはず」

楓「楓には分かりません。あの者はお祖父様を殺したのです。孫のわたくしが仇を討つのがいけない事なのですか」

脇坂「それをいうなら、晋一郎にとって、わしは父の仇だ」

楓「ですから、あの者の仇討ちは良くて楓の仇討ちはいけないということはないはず」

脇坂、軽くため息を付く。

縁側に腰を下ろし足袋の裏を払って縁側に立つ。

脇坂「晋一郎の顔を見たか。多分、この勝負、

もう、仇討ちではない」

楓、脇坂に歩み寄る。

楓「楓には、楓には、わかりません」

脇坂「とにかく、お松殿の文にある通り、立会う事は許すが、手を出すことはならん」

脇坂、離れに入り障子を閉める。

悔しげに佇む楓。

○浅茅が原（朝）

曇り空。

人気のない草原。

対峙する晋一郎と脇坂。

野袴、襷がけの晋一郎。軽衫に袖無し

羽織の脇坂。

松の根元に佇む楓。重蔵の脇差を握り締めている。

脇坂、羽織を脱ぎ、足袋裸足になりながら、楓に目をやる。

脇坂「晋一郎、勝手ながらこの勝負、楓を立ち合わせる。お松殿の頼みだ」

晋一郎「なるほど。そうでしたか。では、この勝負、先生にとっては重蔵殿の仇討ちですか」

脇坂「無論、そうではない。分かっておろう、晋一郎」

晋一郎「はい、そうでしょうね」

脇坂「こちらも、念のため聞いておこう。晋一郎、この勝負、玄之丞殿の仇討ちか」

晋一郎「無論、そうです。先生もそう書き残されました」

晋一郎、懐から脇坂流伝書と書かれた巻物を取り出す。

脇坂「その巻物を持っておったか」

晋一郎「肌身離さず」

脇坂「その巻物には、わしが最初に免許を与える者に思うところを書き記そうと思っておった。だが……」

晋一郎「そうだったのですか」

脇坂「わしも未熟者よ。思慮の足りなさが玄之丞殿に……」

晋一郎「先生、申し訳なきことなれど、もうそのことはよいのです」

脇坂「玄之丞殿がなぜ死を選んだか、知りたくはないのか」

晋一郎「はい、先生を追って旅に出たときは、それを知ることこそが望みでした」

脇坂「そうか。して……」

晋一郎「先生、もう始めましょう。とにかく私はここで父の仇を討ちます。先生と立ち合う事のみを思っ、今日まで旅をしてきたのです」

晋一郎、静かに刀を抜く。

脇坂「わかった。存分に参れ」

脇坂、刀を抜く。

脇坂「いざ」

晋一郎「いざ！」

両者、間合いを取り、ともに正眼で構える。暫くそのまま対峙。

脇坂、ゆっくりと晋一郎の廻りを回り始める。

脇坂「晋一郎、その剣で人を斬ったか」

晋一郎「この剣で斬ったは重蔵殿だけです」

脇坂「そうか」

晋一郎「ただ、つまらぬ喧嘩で人を一人殺めました。悔いております」

脇坂「そうか」

晋一郎、脇坂の動きに併せて間合いを測りながら動く。

晋一郎、上段に振りかぶる。

晋一郎「(鋭い気合) やあ！」

脇坂、下段に構えを変え、切っ先を右に開く。

脇坂「(低い気合) おう！」

晋一郎、一気に間合いを詰め、気合とともに刀を振り下ろす。

脇坂、身体を開いてかわし、刀を晋一郎の左小手めがけて切り上げる。

晋一郎、左小手を柄から放し、切っ先をかわすと、握りなおして脇坂の胴めがけて振り上げる。

脇坂、跳び退って避ける。

晋一郎、そのまま駆け抜け、振り返って正眼。

脇坂、晋一郎に向かい再び正眼。

暫く無言で対峙。

楓、二人の戦いに息を呑む。

形見の脇差を握り締める。

晋一郎「先生、我が父の剣は如何でありましたか」

脇坂「玄之丞殿の？」

晋一郎「父は先生と立ち合った後、剣の修行が虚しいといって腹を切りました」

脇坂「そうであったか」

晋一郎「我が父の剣は虚しきものでありましたか」

脇坂「それは知らぬ！」

脇坂、歩み足で無造作に間合いを詰めて打ち込む。

晋一郎、受ける。

脇坂「もし、剣の修行が虚しければ、生きることもまた虚しい」

晋一郎「父の一生が虚しいというか！」

晋一郎、攻勢に転ずる。

脇坂、晋一郎の攻めを悉く受ける。

脇坂、攻めを受けつつ言う。

脇坂「考えてもみよ。晋一郎」

両者、鏝迫り合い。

見詰め合う目と目。

脇坂「人の生涯が虚しいかどうか、余人が測りうるものではない！」

晋一郎、跳び退って再び上段に構える。

脇坂、正眼。

晋一郎「(吼えるような気合) おおう！」

脇坂「(晋一郎の気合に応じて) おおう！」

晋一郎、左半身を晒した上段のまま、ジリジリと間を詰める。

脇坂、切っ先を晋一郎の喉に向け不動。

晋一郎、更に気合を掛けるが、脇坂は応えない。

晋一郎、さらに間を詰め、一足一刀の

間合いを越える。

晋一郎、脇坂、共に動けない。

ぶつかりあう視線。

脇坂、僅かに引いて見せる。

晋一郎、鋭い気合と共に右足を大きく踏み込み、刀を振り下ろす。

脇坂、飛び込むように踏み込んで刃の下を潜り、晋一郎の喉に諸手突きを送る。

晋一郎、首を傾げて突きをかわすが、脇坂の刀は下顎を掠める。

振り下ろした晋一郎の刀の鏝が脇坂の左肩を打つ。

脇坂、跪く。左手が柄から離れる。

晋一郎、跳び退る。

脇坂、跪いたまま右手で刀を構え、晋一郎を見上げている。

晋一郎、脇坂を見下ろす。顎の傷からの出血が首から肩を濡らす。

晋一郎「先生……」

脇坂、晋一郎の背後を見る。

脇坂「晋一郎！」

晋一郎、振り返る。

楓が脇差を構え、晋一郎にぶつかってくる。

楓「(悲鳴のように) お祖父様の仇！」

晋一郎、避けようとするが避けきれず、脇差を脇腹に受ける。

楓、返り血を浴び、悲鳴を上げて尻餅をつく。

晋一郎、楓を見下ろして微かに笑う。

晋一郎「天狗殿、楓殿に仇を取られ……」

晋一郎、倒れる。

○晋一郎の藩の城全景

青空にそびえる白壁の天守と郭。

男の声「これより、佐伯玄之丞と脇坂彦衛門の試合を行う。両名、これへ」

○城内・馬場

馬場に幔幕が四角く引き回されている。幔幕の内、中央奥に藩主と小姓数名。左右に藩士数名が床几に腰を下ろしている。

幔幕の外から佐伯玄之丞（28）と脇坂彦衛門（38）が、小姓に導かれ入ってくる。

両者、藩主に向かって一礼し、左右に分かれて、向かい合う。

藩主の側に座る、検分役らしき男が立ち上がり、声を張り上げる。

検分役「試合は木太刀にて行う。勝負は一本はじめ！」

玄之丞と脇坂、互いに一礼した後、木刀を構える。共に正眼。

玄之丞、左右に動き、間合いを測る。

脇坂、玄之丞の動きに合わせて対応する。

両者の動き、止まる。暫く対峙。

玄之丞、気合を掛け、一気に間合いを詰めて打ちかかる。

脇坂、受けること、数合の後、鏢迫り合いになる。

睨み合う両者。互いに跳び退って間合いを取る。

脇坂、右足を引いて、上段に構えを変える。

脇坂「（気合）やあ！」

玄之丞「（応じて）おう！」

玄之丞、正眼のまま、ジリジリ押す。

脇坂、上段のまま不動。

玄之丞、尚も押して一足一刀の間合いに近づく。

玄之丞「（激しい気合）おおう！」

玄之丞、歯を食いしほり、尚も押す。

脇坂、動かず、再び気合で応える。

玄之丞、大きく右足を踏み出し、間合いに入ると、そのまま突きを繰り出し、脇坂の喉を狙う。

脇坂、身体を開いて突きを避けるが間

に合わず、木刀が喉の皮を破る。  
小さな血しぶきが上がる。

脇坂、駆け抜ける玄之丞に渾身の一刀  
を振り下ろすが届かず。

検分役「それまで！」

残心を解き、振り返る玄之丞。

戸惑いつつ検分役を見る。

検分役、頷く。

脇坂、玄之丞に静かに一礼する。

玄之丞、戸惑いながら礼を返す。

脇坂、藩主に一礼して幔幕を出て行く。  
見送る玄之丞。

○城内・井戸端

井戸から水を汲む玄之丞。

手ぬぐいを桶に浸し、顔をぬぐってか  
ら肩脱ぎになる。

右脇腹に長い蚯蚓腫れのような傷があ  
るのに気がつく。

驚きつつ、着ていた胴着を見る。表面  
に引き皺れたような痕。

呆然と立ち尽くす玄之丞。

○山形屋・離れ室内

布団に横たわる晋一郎。

傍らに座る脇坂。左手を肩から吊って  
いる。

脇坂「あの御前試合で、勝ちを譲られたと玄  
之丞殿は思っただけだ」

晋一郎、寝たまま脇坂を見上げる。

晋一郎「そうだったのですか」

脇坂「その思いが、二十年の長きに渡って玄  
之丞殿を苦しめた。まこと、我が思慮が足  
りなかった」

晋一郎「それで、先生は本当に勝ちを譲られ  
たのですか」

脇坂、薄く目を閉じ、暫く絶句する。

脇坂「有体に言えば、そうだ」

晋一郎「なぜそのような……」

晋一郎、身体を起ここそうとする。

苦痛に歪む顔。

脇坂「寝ておれ。傷口が開く」

脇坂、右手で晋一郎の肩を押さえる。

脇坂「あの御前試合は、藩の剣術指南役を決める試合だった。というより、ほぼ決まりかけていた玄之丞殿に対して、故障を申し立てるものがおったのだ」

晋一郎「反対される方が……なぜ？」

脇坂「それはわしも知らぬ。とにかく、それでわしが担ぎ出された」

晋一郎「先生も指南役に……」

脇坂「馬鹿な。わしがそのような男ではないことは知っておろう」

晋一郎「そうですね」

脇坂「恩を受けた方が間に入ってな。断れなかった」

晋一郎「そうでしたか」

脇坂「あの頃、わしは道場を開いたばかり。玄之丞殿は歴としたご家中。わしには勝たねばならぬわけはなく、玄之丞殿の方は負けられぬ立場だった」

晋一郎「それで、先生は負けた……」

脇坂「だが、わしは思い違いをしていた。玄之丞殿は真の剣士であったのだ。わしは、その矜持を深く傷付けた。剣の道を求める者でありながら、そこに思いが至らなかつた。わしは愚かだった」

右手を突き、俯く脇坂。

晋一郎「先生……」

楓の声「もし、脇坂様」

脇坂、顔を上げ振り返る。

障子に女の影。

脇坂「楓か」

楓の声「はい。あの、佐伯様はお気がつかれましたか」

脇坂「おう。今、昔話をしていたところだ」

楓の声「あの、佐伯様のお菓を……」

脇坂「入ってまいれ」

楓の声「いえ、ここで」

脇坂「何を申しておる。いいから入れ」

脇坂、立って障子を開ける。  
縁側に平伏する楓。

傍に盆に載せられた小桶、晒し、練り  
薬の包み。

楓「佐伯様、も、申し訳ございません」

晋一郎「何をいうのです。楓殿は当然のこと  
をしたのですよ」

楓「楓は、人を、人を刺す事が、あのよう  
に恐ろしいものだとは知りませんでした」

晋一郎「楓殿はそれをやったのです。重蔵殿  
のために……」

楓、俯いたまま動かない。

脇坂「楓、いいから入って晋一郎の薬を替え  
てやれ。肩が碎けたわしではどうにもなら  
ん」

楓「おゆるしてください。楓は、楓は……」

脇坂「晋一郎が眠っている時はやっていたで  
はないか」

晋一郎「先生、いいですよ。自分で……」

楓、立ち上がると縁側を小走りに走り  
去る。

脇坂「頑固な娘だ。どれ」

脇坂、あぶなっかしく盆を片手で持ち、  
晋一郎の傍に戻る。

晋一郎「いいのですよ。楓殿にとって  
は、はいまだ祖父の仇。どうしていいの  
か分からないでしょう」

脇坂、晋一郎の布団を剥ぐ。

晋一郎は下帯一。腹に血が滲んだ晒し  
が巻かれている。

脇坂「おい、向うを向け」

脇坂、晒しを解き、薬を替える。

晋一郎「申し訳ありません」

脇坂「背中  
の傷はどうした」

晋一郎「ヤクザ者と喧嘩を  
しました」

脇坂「馬鹿なことを」

晋一郎「先生を追って旅をして、  
色々な目に会いました」

脇坂「そうか」

晋一郎「先生、剣の道は生きる道に通じます

か」

脇坂「無論だ。わしはそう信じておる」

晋一郎「ならば、私は剣を捨てましょう」

脇坂、薬を替える手を止める。

脇坂「何故だ」

晋一郎「私は生きる道を見失っておりまして。父の仇というだけではなく、先生との立ち合いが生きる標でした。剣が、剣の道が必要でした」

脇坂「もう、いらなくなったか」

晋一郎「はい。今はそんな気がします」

脇坂「よし、これでよかろう」

脇坂、晋一郎に布団を掛ける。

晋一郎「ありがとうございます」

脇坂「で、どうする」

晋一郎、天井を見ながら

晋一郎「さて、傷がいえたら、まずは国へ帰りましょう。母と妹がいます」

脇坂「そうだな」

晋一郎「そうだ。先生、あの脇坂流伝書、改めて私に授けてください」

脇坂「なに。あの巻物か。何故だ」

晋一郎「そして、お願いがあります。先生の手で父の仇という文字を消してください」

脇坂「晋一郎、そなた……」

脇坂、晋一郎を見詰める。

晋一郎「それとも、先生、いまだ免許には足りませんか」

脇坂、無言で晋一郎を見詰め続ける。その目が潤んでいるように見える。

〈了〉